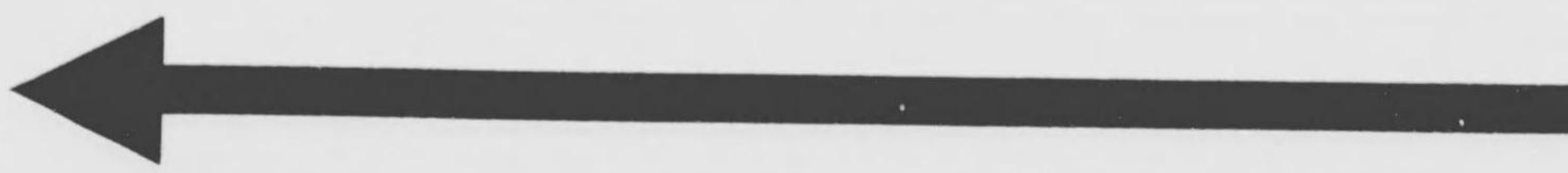


354
31

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30^{6m} 1 2 3 4 5

始



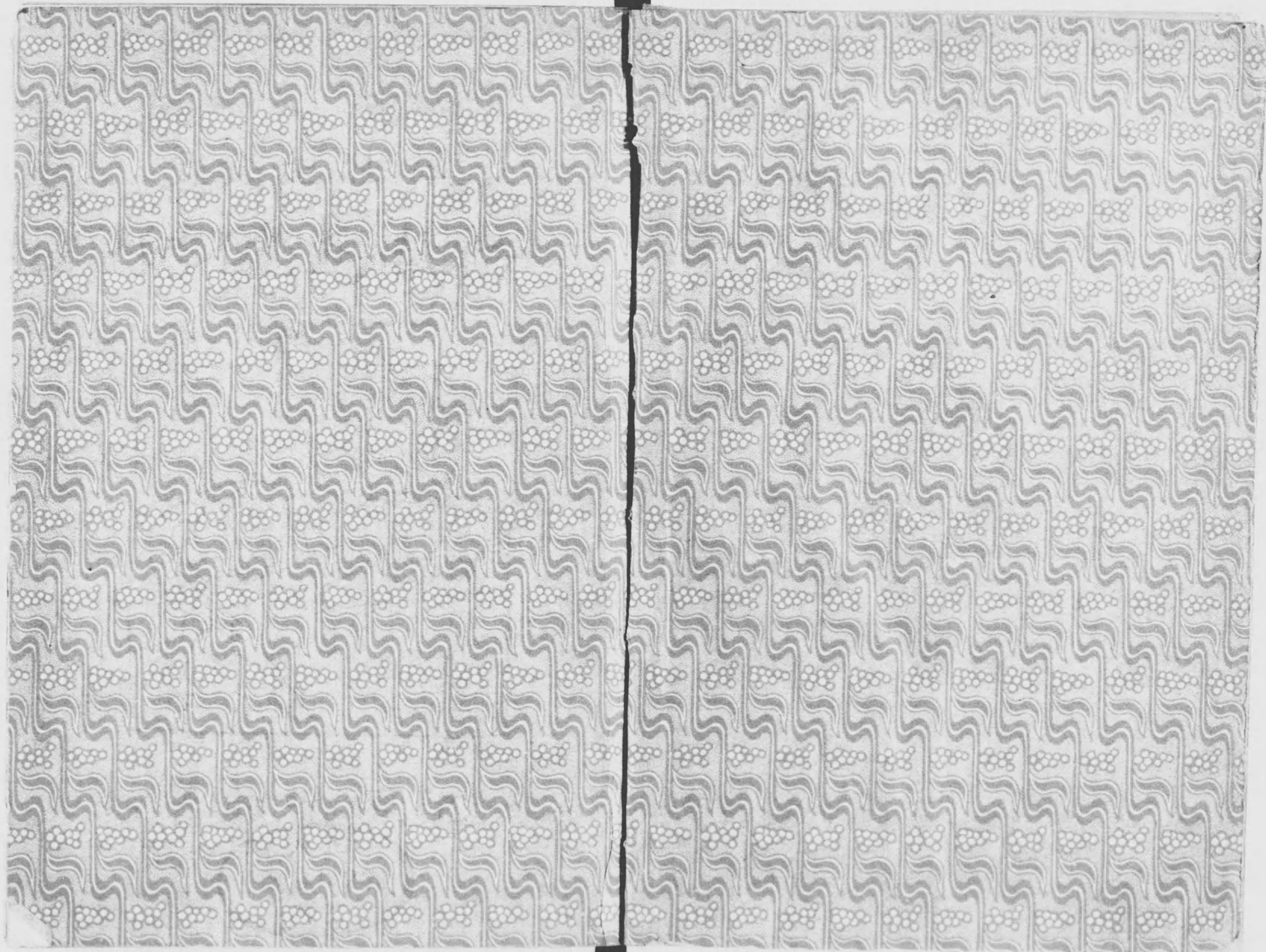
354

31

征 独 紀 念
岳 南 乃 健 兒



伊 藤 吐 郎 著

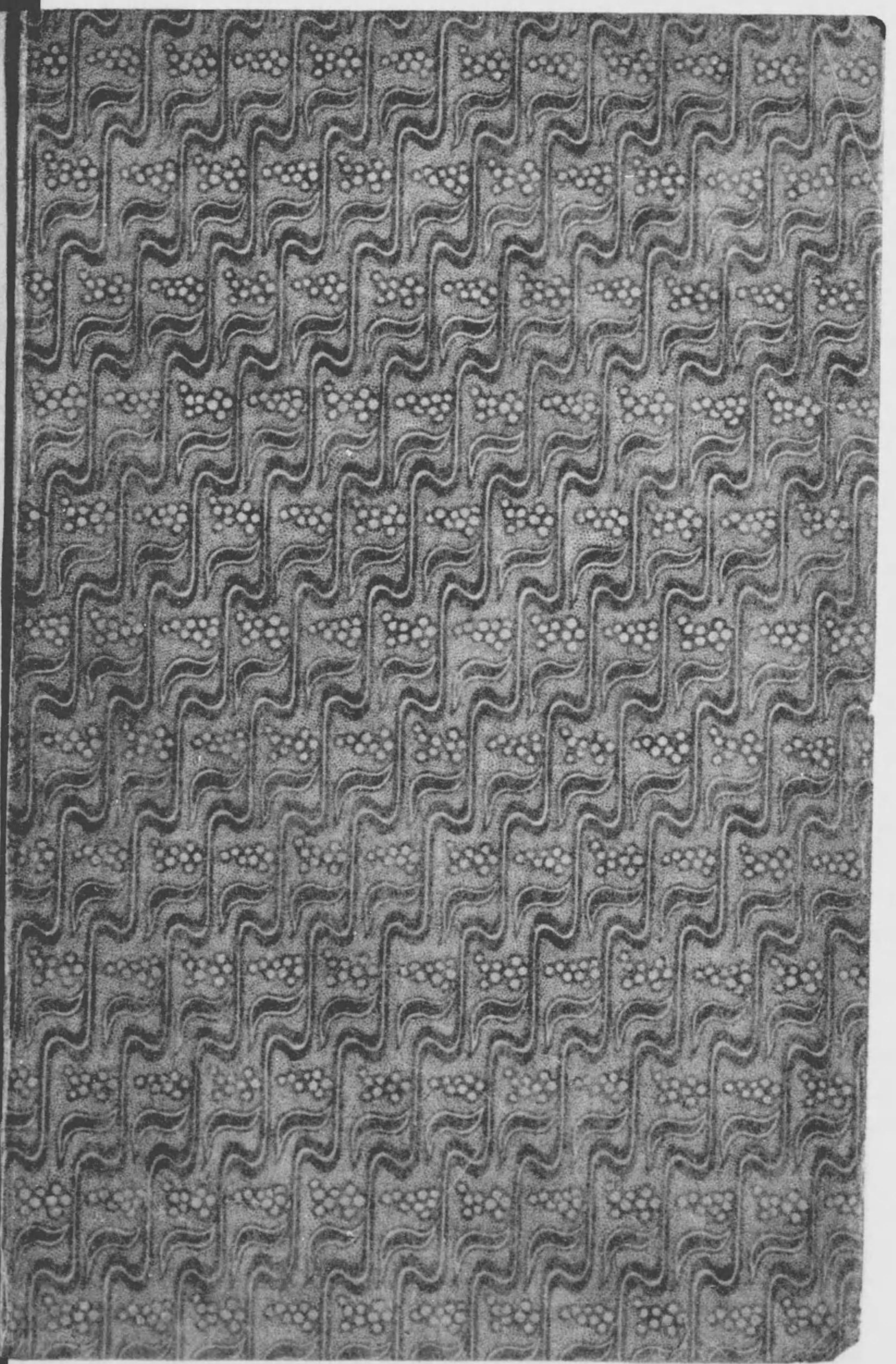


征 独 紀 念
岳 南 乃 健 兒



伊 藤 吐 郎 著

大 正
3. 11. 27
内 交



この勞作一篇を――

勝利に伴ふ歡喜の裏面に潜んだ悲哀――

犠牲の人々の。

異郷の土に、故國を思ふ、その哀傷すべく、

尊敬すべき犠牲の人々の墓前に捧ぐ。――



交戦國の元首



中央下白帝 其下奧帝 向左上露帝 其下偉大統領 向右上塞帝 中央英帝



陣頭に起るとるカイセリ降下

將 軍 の 係



神尾攻圍軍司令官



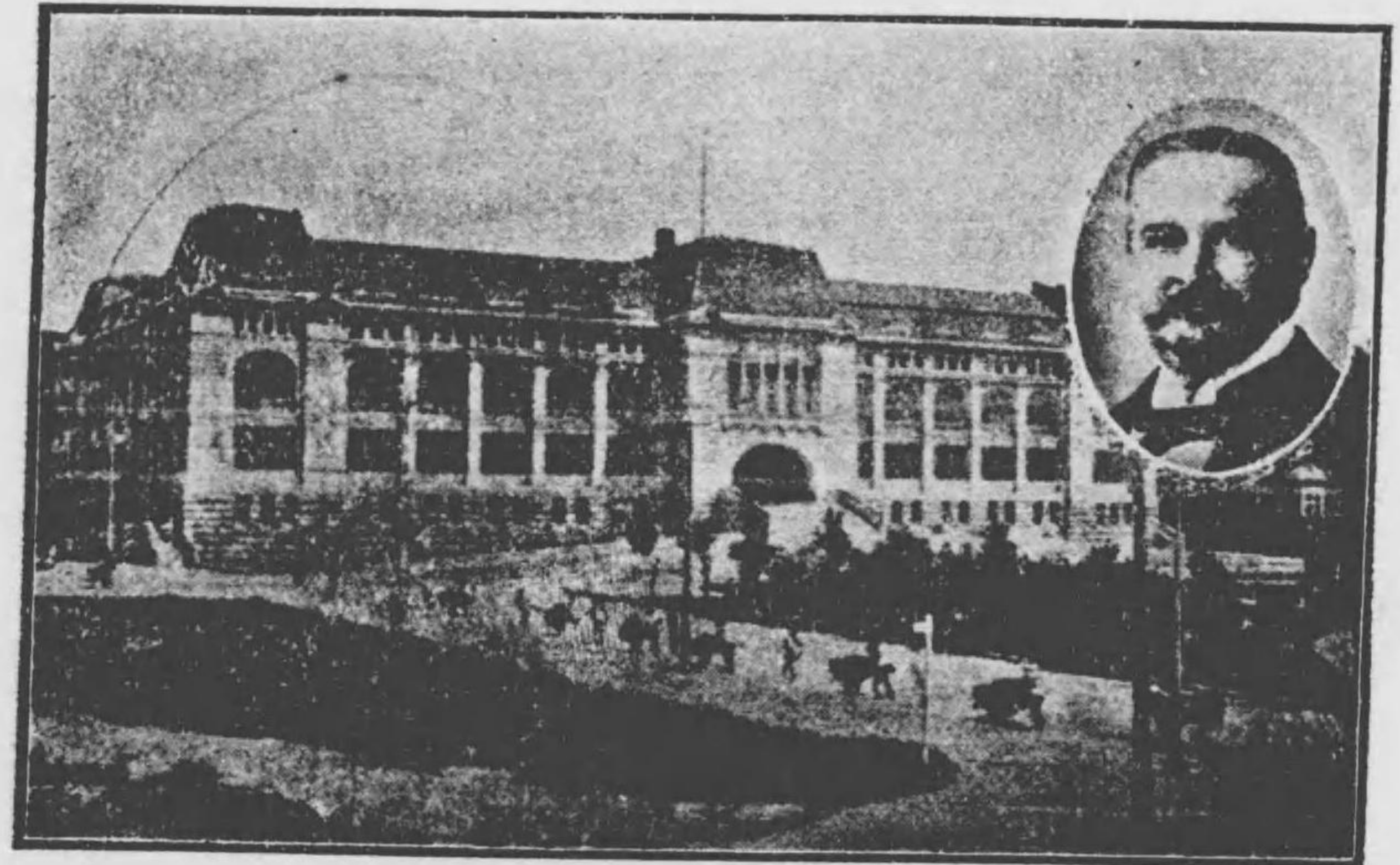
加藤第二艦隊司令官



淨法寺第二十九旅團長

負氣衝天
淨法寺

ツデルク總督とその官舎



膠洲灣地圖



高野濱松聯隊長

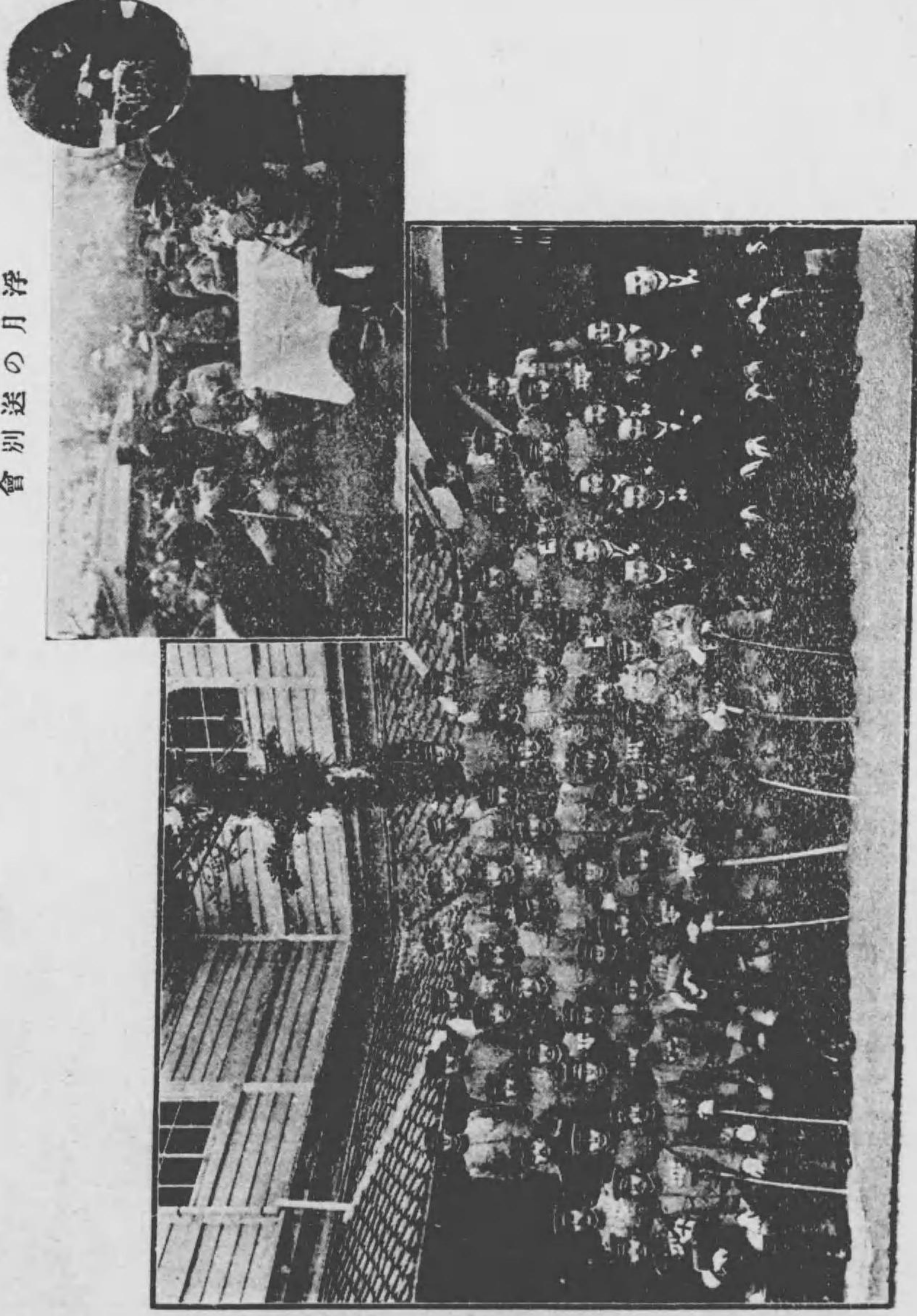


大内靜岡聯隊長

軍旗のかけど

出征の前

浮月送別會



濱松國光箱記の撮影

(明治二十五年三月十七日第三種郵便物認可)
報知新聞
 外號
 大正三年十一月
 發行所 報知新聞社
 東京市神田區
 大正三年十一月
 發行所 報知新聞社
 東京市神田區

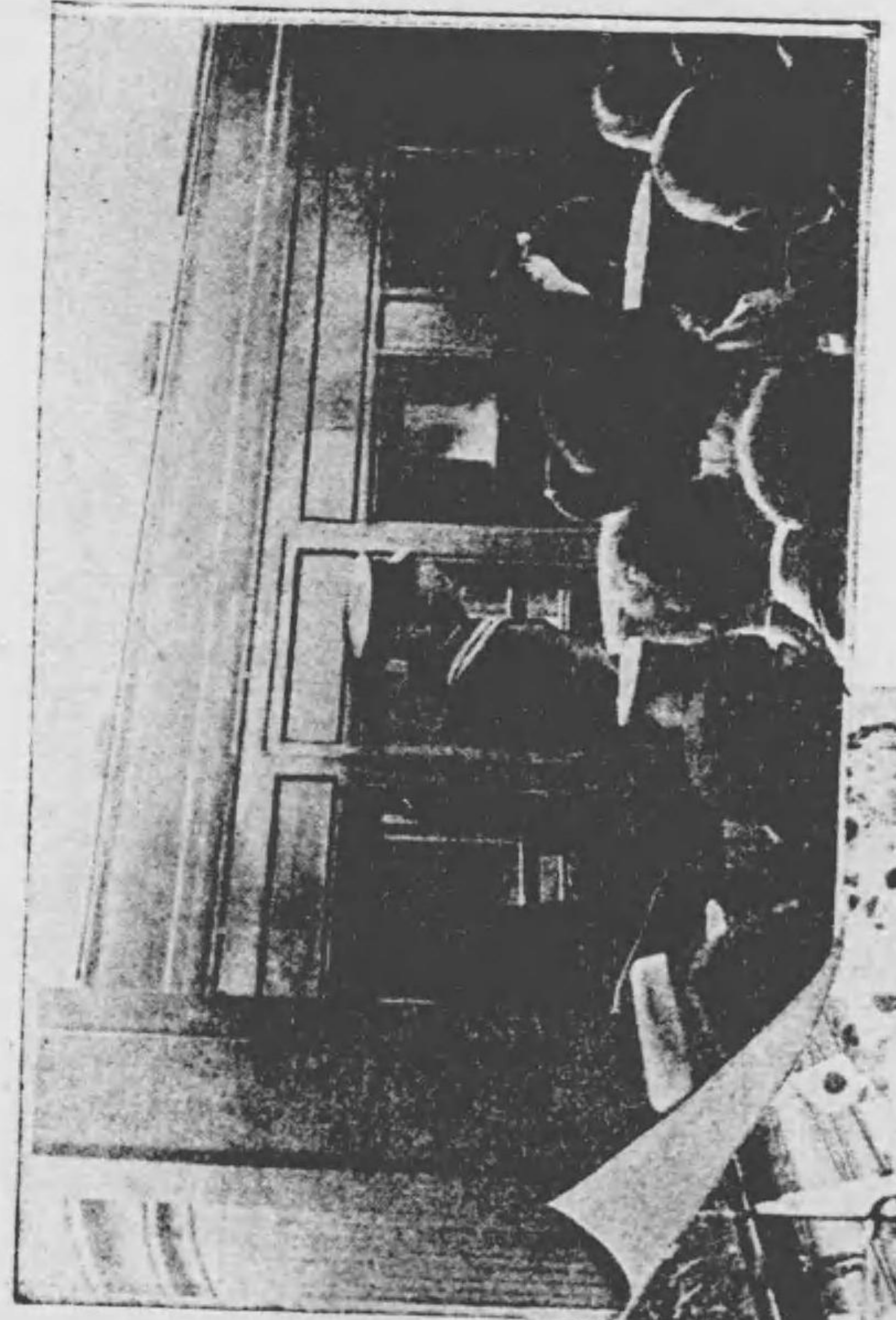
青島陥落

唯今青島陥落せり
 ありたり

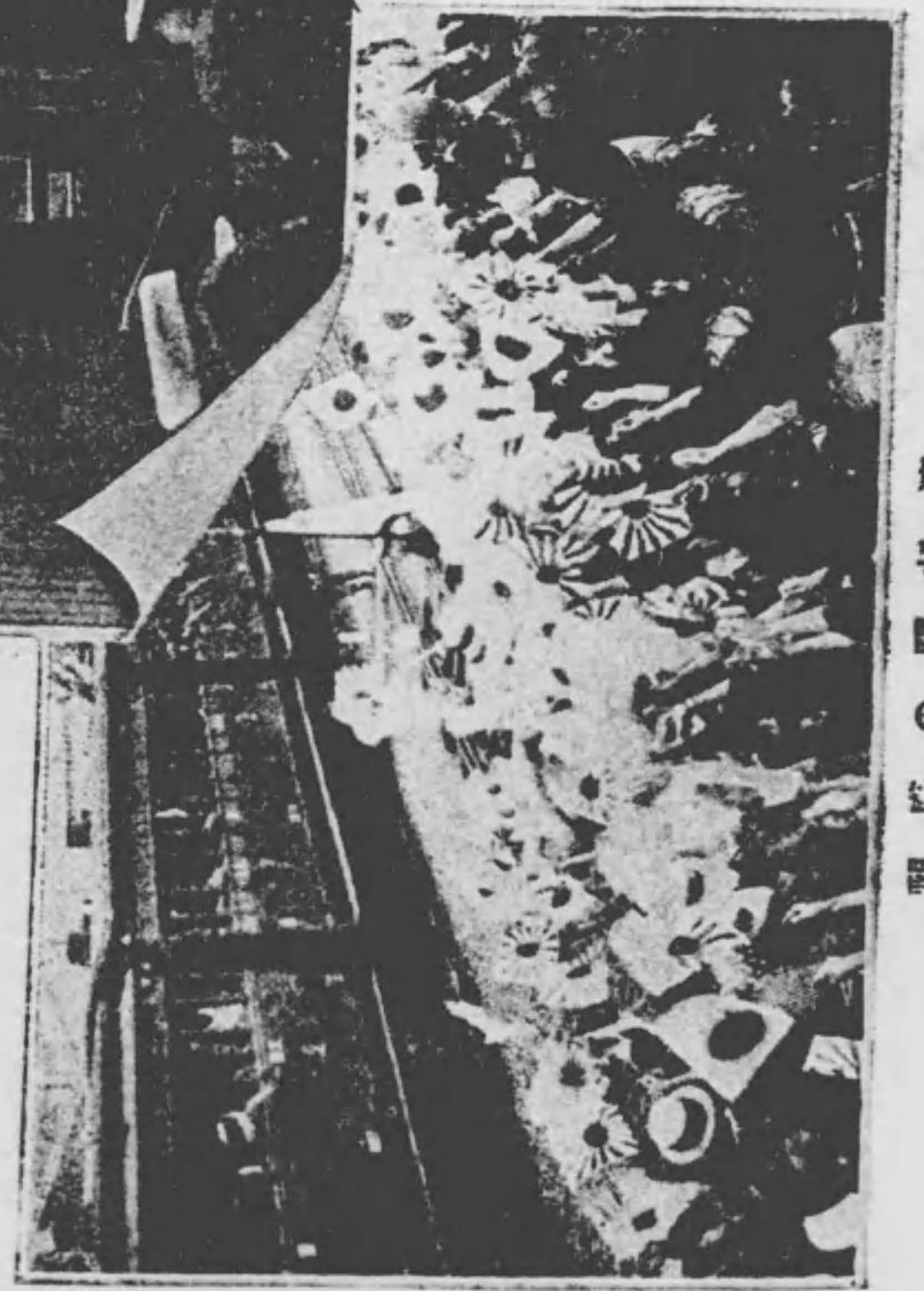


青島陥落とその夜

別巻の頭頭新聞

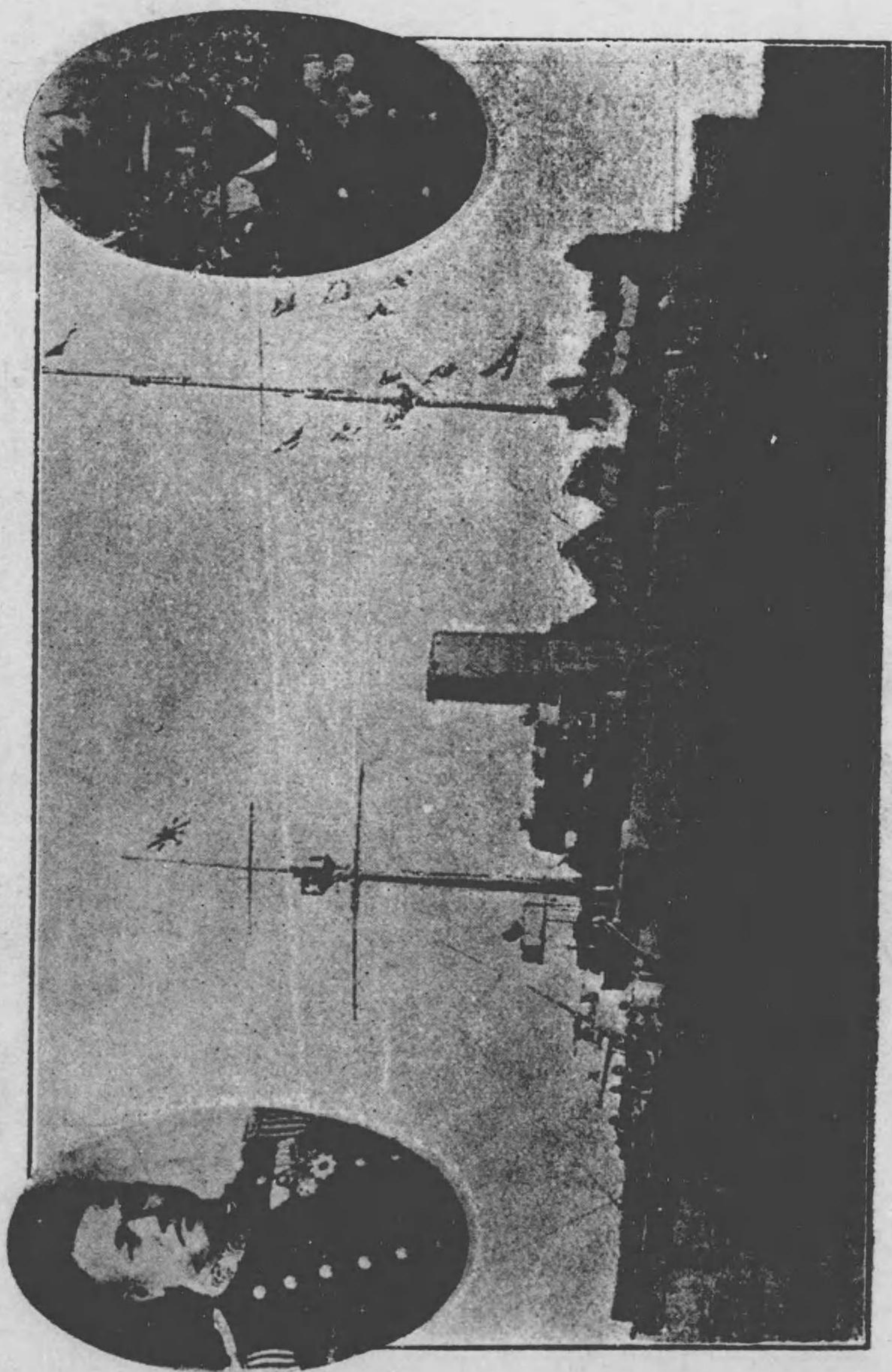


かどての日



漢松の松松

伊賀副艦長



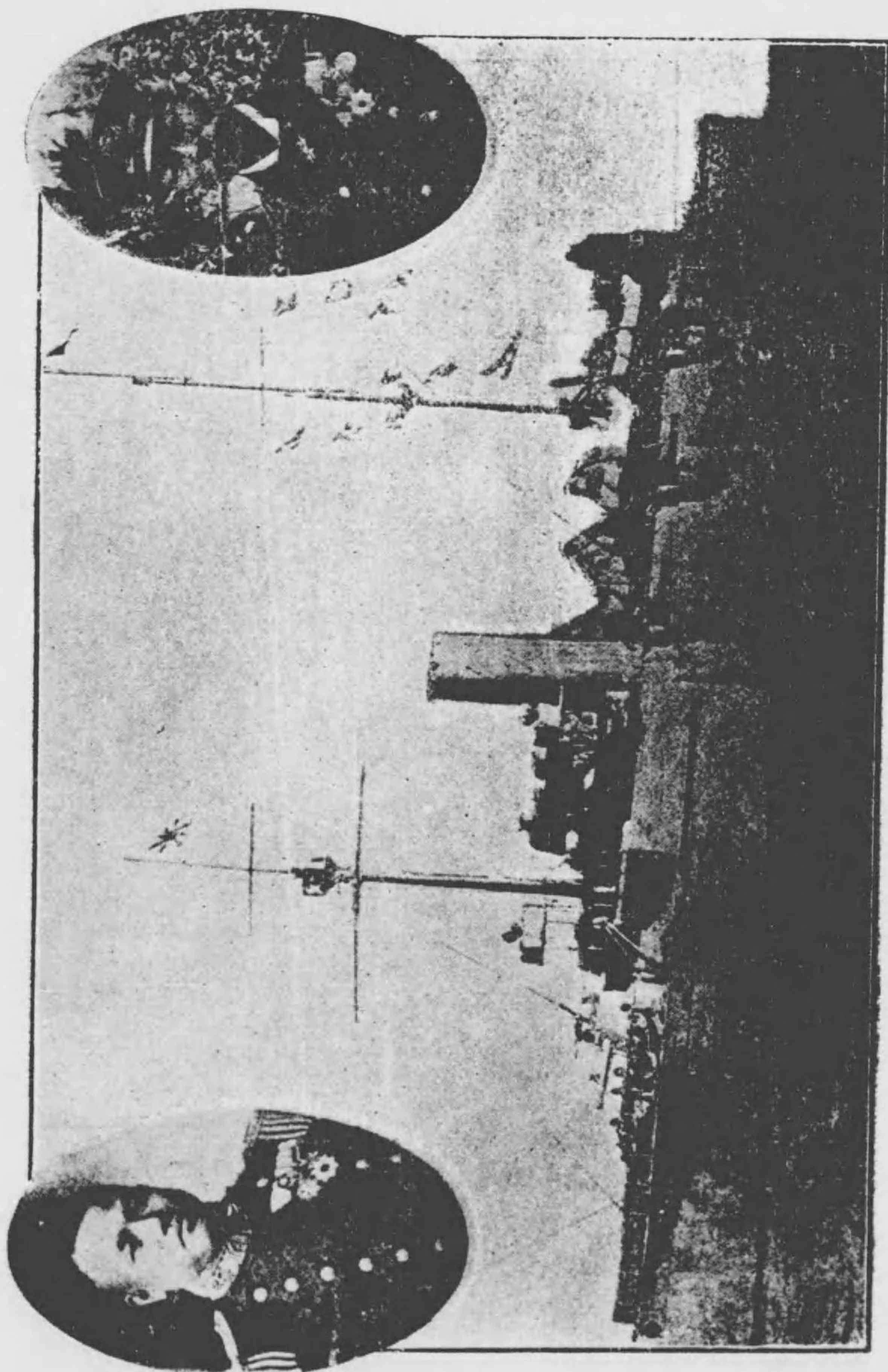
古賀副艦長

自序

何かしら、書いておれば機能の蓄積を感じる自分が、最近一ヶ月、晝寝の暇に書きこなした無駄書きの固り——それは此の労作一篇であつた。静岡に来て一年餘、西も東もわからぬけれど、無駄書きすること、陸高橋から富士を仰ぐことだけは忘れなかつた。

若し此の無駄書きの内容が、「征獨記念」といふ看板にふさはしく、又た自分の畏敬し、好愛する富士の「靈」の幾部分を表現し得てゐるものならば、自分は、それといふ。

伊東艦長



古賀副艦長

自序

何かしら、書いておねば機能の鬱積を感じる自分が、最近一ヶ月、晝寝の暇に書きこなした無駄書きの固り——それは此の労作一篇であつた。静岡に来て一年餘、西も東もわからぬけれど、無駄書きすること、陸高橋から富士を仰ぐことだけは忘れなかつた。

若し此の無駄書きの内容が、『征獨記念』といふ看板にふさはしく、又た自分の畏敬し、好愛する富士の『靈』の幾部分を表現し得てゐるものならば、自分は、それでいい。

序でに、此の勞作に對する材料の提供を惜しまれなかつた、
出征將校遺族二三の人達ちと、在郷軍人有志の、好意を嬉れし
く思ふ。

大正三年十一月のなかばに――

伊藤生

目次

其一 虚偽の平和

- (一) 埃國皇室の悲劇……………一
- (二) 巴半島の妖雲……………七
- (三) 獨帝微笑めり……………十三
- (四) 賢か愚か獨帝……………二十三

其二 同盟國起つ

- (一) 見よ其義氣と任俠を……………三十四
- (二) 兩帝の交驩今や昔語……………三十九

其三 戰雲漠々

- (一) 巴里か伯林か……………四十五

其四

- (二) 月明の夜の獨帝……………五十六
- 日東常勝國……………

其五

- (一) 最後の通牒まで……………六十四
- (二) 意義ある還御の日……………七十二
- 遺恨二十年……………

其六

- (一) 待たゝる午砲一發……………八十一
- (二) 宣戦の大詔煥發……………八十八
- (三) 進むは何處ぞ……………九十八
- 軍國の富士……………

其七

- (一) 健兒の向ふ處……………
- (二) 膠洲灣の防備……………一一六
- 快報耳に懐し……………一二三

其八

- その夜の首途……………
- (一) 征人月下に立つ……………一三五
- (二) 出征の跡……………一四二

其九

- 戦闘参加……………
- (一) 風悲し異郷の墓……………一五二
- (二) 非戦闘員立退……………一五九

其十

- 戦機は熟せり……………
- (一) 健兒前線に進む……………一七〇

- (一) 此の日天高し……………一〇四
- (二) 首途の盛宴……………一〇九

征 獨 紀 念 岳 南 の 健 兒

報知新聞記者

伊藤咄郎著

其 一 虚偽の平和

(一) 奥國皇室の悲劇

西曆一千九百十四年六月二十八日朝まだき、セルビヤの一職工の投じた爆弾に、不幸奥國皇太子フランツ、フェルチナンド太公及び同妃兩殿下はボスニアなるセラゼボ街上の露と消えさせられた。

高貴のお方の斯かる傷ましの御最期！洋の東西を問はず如何に多くの人々の驚異の眼を睜らしめたことであらう。そして、少數の識者は、早くも此處西歐の一角に

其十一

旭旗翩躚

(二) 壯烈第一飛報……………一七七

(一) 記せよ十一月七日を……………一八一

(二) 健兒の奮闘……………一八八

其十二

歡樂の日

(一) 待たれた快報……………一九五

(二) 陥落後の青島……………一九九

其十三

犠牲の人々

(一) 噫、高千穂艦……………二〇六

(二) 萬骨枯る……………二二二

附 録 (戦死傷者人名)

—— 目次終 ——

暗雲の棚曳かんとするを認めたとてあらう。當時の伯林電報は其の悲報の詳細を傳へて曰く

●●●●●●●●●●●●●●●●
 フランツ、フェルチナンド、埃國皇儲殿下はセラゼボの議場に赴かれんとする際、兇漢殿下の御馬車に向ひ爆裂彈を投じたるに、彈丸は殿下の腕に當りたるが、殿下は之を傍に投棄せられたる際破裂したる爲め、後車に乗り居たる副官若干名負傷したるも殿下は其儘議場へ赴かれたり、而して其歸途に塞爾比人の如き十七歳の中學生ブリンチ、と稱する者、プロウニング拳銃を以て殿下に向ひ一彈を發し、其の頭部に負傷せしめ第二彈は御同乘の妃殿下に命中して其体を貫通したり、之れが爲め兩殿下共にコナツクに至れる途上に於て薨去せられたり、老帝陛下は此の悲報に接し最も深く落膽せられイシエルよりシエールンに赴かれたり、又た獨逸皇帝はキールに於て此の報を落手せられ直ちにキールの海軍競技會を閉鎖せられたり。

またロイテル社の倫敦通信員はセラゼボの來電なりと稱して左の通信記事を發表した。

●●●●●●●●●●●●●●●●
 埃國皇太子フランツ、フェルチナンド、太公殿下と妃殿下は市會堂に於ける歡迎會に臨まれんとて馬車にて通御中一人の活字職工は爆裂彈を投じたり、然も爆裂彈は馬車の御通過後に爆發せし爲め供奉員二名と群衆六名の負傷ありしも殿下は御異常なく市會堂に赴かれたる上、又馬車を驅つて市中を御通過中高等學校の一學生は二回迄殿下を狙撃せり、之が爲め兩殿下は生命に係る重傷を受けられ、直ちにコーナクに御運次申上げしも數分間にして薨去ありたり、兇行者は即座に捕縛せられしも殆んど群衆の私刑に會して死せん計りなり、兇行前來イシエルにあらせられし埃國老帝は此報に接して御心痛甚だしく維也納へ御歸還の準備中なり。

それから、一週間後に於ける七月五日のベルリン電報は暗殺事件に就て稍や進ん

だ左の如き消息の發表を試みた。

プタベスト市に於ては、埃國皇儲暗殺事件の捜索中なるが、セルボクロアチヤの一學生が暴露せしめたる所に依れば、今回の陰謀はベルグラードに於て組織せられたるものにして、其黨員には陸軍々人、實業家、辯護士及塞爾比國會議員等ありて、其經費は實業家及塞爾比政府より支出せられたり、而して其陰謀の目的は塞爾比人の住居する埃國の村落を常に動搖せしむるにあるのみならず、尙ほ更に暗殺を計畫せんとして準備中なり、而して兇行に用ひし爆裂彈六個、拳銃四挺はベルグラードより兇行地セラエウオに送附せられたるものにして、兇行に加はりたる塞爾比人は九名以上に及べるが、塞爾比王國の大塞爾比主義の運動の爲めに煽動せられたるものなりと、而して最初モスター練兵場にて計畫せる暗殺の行ひ難きを知るや、彼等陰謀者はセラエウオの市街に列を作り暗殺の決行を期し居たるもの、如し。

兇漢の爲めに不慮の薨去を餘儀なくせられし薄倖なるフランツ、フェヂナンド皇儲殿下の御徳性を順序として偲ぶの必要を思ふ。埃國大使館參事官フォン、センチパニー氏は語つて曰く

「殿下は若し時から陸軍に御入りになつて一兵卒よりの御教育を受けられ、脊の高い誠にお立派な溫和な方であつた、又た其の御資性は博愛で仁慈で下級の一兵卒にも御親切であらせられ國民は皆其仁徳を慕つて居つた、殊に殿下の家庭は眞の基督教的の圓滿な家庭で全國民の模範とする處であつた、又軍人を愛される事我子の如く、目下の埃國陸海軍に殊に海軍の發達は全く殿下の御力と云つて宜い、更に殿下は自然の風光をお好みになり宮殿の如きも暗殺されたボスニヤのコンピットと云ふ眺望絶佳の地に在り、自然の大公園ともいふべき觀を呈してゐる、今より十八年前殿下は印度よりの御歸途東京に立寄られ、昭憲皇太后陛下にも親しく御對顔、非常の御款待を受けさせられた、依て陛下崩

御の際にも特にブット中佐を御名代として大喪儀に参列せしめられた、殿下は大の東洋趣味愛好家で、中にも日本の松の盆栽と狛とがお好で毎年大使館からお送り申してゐた、現にコンピット城には七百何十個と云ふ高價な日本の盆栽を御所有遊ばされ、有名な東洋式の庭園と評されてゐる位である」云々。

簡單ではあるけれど、其の一斑を知るを得る。斯かる御資性の殿下と聞いては、今更ら埃國皇室のために悲しまずにゐられない。

果然、埃國老帝フランツ、ヨーゼフ陛下は起たれた。

そして、獅子吼怒號して曰く、

「朕は、朕の皇儲の靈に慰安を與ふるために朕の皇室と朕の國民に禍ひせしセルビヤ國民を塵殺し且つ其の領土を朕の領土たらしめん」と。

而し、國は小うても歐洲の日本帝國を以て自任するセルビヤは、埃國老帝の咆哮に些も畏怖の念を覺えなかつた。否な、寧ろ大に示威運動を試みたのであつた。斯くて干戈は遂にバルカンの半島に於て交へらるゝことゝなつたのである。佩劍憂々、兵馬縱横。バルカンの風物爲めに腥さも之れからである。

(二) 巴半島の妖雲

バルカン半島の一角、既に妖雲湧けり矣。

常に凡ての禍源を抱藏するバルカン半島の、其處に生息する幾多の人々は、動もすれば兵馬の響きを聞き馴れてゐるため、將に動かんとする戦雲の様子に、心から興味を喚起を禁じ得ない者は至つて尠なかつたけれど、小さいセルビヤの意氣！怒髪天を衝く底の埃國の憤激！今度ばかりは手に汗して其妖雲の推移を待つた。

其月の二十三日午前八時、埃國はセルビヤに向け所謂最後通牒を發した。而して

其の回答期限は、四十八時間といふにあつた。最後通牒の内容は無論暗殺者處刑に關する極端な要求であつた。セルビヤは、事件發生の當時既に示威運動を試みた程である。埃國の傲岸な、而して壓迫的な極端なる要求を應諾する筈がない。豫定の四十八時間内に、最後通牒に對する回答を發送したけれど、其の内容は到底埃國の満足を買ふべきものではなかつた。

歐洲五大強國の一に算へらるる埃國の、極端なる憤怒を招致する『皇儲暗殺事件』を突發せしめた其責任だけでも、小なるセルビヤは大に萎縮せねばならないと思はるゝに、如何に其の要求的干渉が峻嚴に失したとは云へ、之れに對する充分の回答を與へざりしは、其處に非常な決心と覺悟とが、深い根柢を有してゐたに違ひない。云ひ代ふれば、彼れは埃國に對し平素動かすべからざる敵意を抱藏してゐたものに違ひない。

之れに就て我が帝國の外務當局は斯う語つてゐる。

由來塞爾比には巴爾幹の覇を稱へんとする所謂大塞爾比主義の彌漫せるあり、即ち大塞爾比帝國と云ふが如きは此主義に胚胎せる者にして一千九百十二年末の巴爾幹戰爭の如きも亦此主義に促されし者なり、然して千九百八年埃國が塞爾比人と同人種なるボスニア、ヘルツェゴヴィナ二州を正式に併吞せし際、塞爾比は之を以て大塞爾比主義の一頓挫となし兵を構へて之に反抗し反つて列強の嗤笑を招きし事あり、是れ即ち埃國皇儲及び同妃を暗殺するに至りたる最大原因なり、單に全塞爾比主義と云ふも之が協會組合等は極めて有力なるものにして始んど塞爾比人の通有性なると共に一面更に塞爾比の國是たる觀あり、故に此主義を抑壓せんとするは至難の事たるにも拘らず偶々埃國の最後通牒は是れを要求す、然も巴爾幹戰爭の傷未だ癒えざる塞國は自國の兵力を信賴して鞏固たる回答を爲し得ざるを以て結局露國の後援を請ふに至るべく是れ正に事局紛錯の第一歩にして、當然獨逸は此事件に第三國の干渉を許さずと主張するに至

るべし。是に於て埃塞事件は廣く歐洲外交界に波及し容易ならざる活動を呈するに至るべき順路なれども、若し露國にして塞爾比を援助せざるか或は其援助にして薄弱ならんか、塞爾比は結局屈服するの外なきに至るべし、固より大塞爾比主義の塞爾比は隣邦ノビバザールを経由しマセドニアを從斷してイドジニアン海に瀕せるサロニカ迄の獨逸の大鐵道計畫を阻害せる等、埃獨兩國に對しては從來對抗的態度を維持せる事故若し此談判にして一步を誤らば塞國は甚だしき屈辱を見るべし、然るに埃國の最後通牒に對する塞國の回答の埃國政府へ致されたる二十五日の露國政府機關新聞は社説を掲げて曰く「埃塞兩國の關係破裂し萬一開戦を見るが如きことあらんか、露國は到底傍觀し能はず」と聲明し、其他國民の輿論は埃國と親善なる獨逸の態度を杞憂せるもの、如きも、概ね左の主張を有するに似たり、「露國が常に平和に戀々たるは明なる事實なり」と雖も當然負擔すべき歴史的責任は盡さざる可からず、今や唯斷乎不拔の決

心と和戰兩様の準備とを以て、事件の進捗に對するあるのみ、而して和戰の撰擇は獨逸の欲する所に委するのみ」而も塞爾比は埃國に回答を交附する三時間前、即ち二十五日午後三時を以て動員令を下して其の敵意の在る處を明示し、獨逸の各都市に於て親埃的の示威運動あり、殊に伯林市に於ける街路は頗る雜沓し、民衆は愛國的の唱歌を歌ひ埃伊兩國の大使館前にては威嚴ある示威運動行はれたるのみならず一方露國に於ては二十六日御前會議を開き、陸軍大臣スチヨムリノフ氏は塞爾比國を援助すべきを主張し既に有ゆる準備を爲せりとの報あり、果して然りとすれば歐洲の天地は將に一大戰亂場と化するなきを保せず、由來露國の巴爾幹に勢力を扶殖せんとするや久し、最近の巴爾幹戰爭に於ける塞爾比勃牙利の勇敢なるスラブ族の活動は露國の快としたる處にして、スラブ族とチユートン族及日耳曼族との消長は、巴爾幹に於ける露國對獨埃の勢力の消長に關するを以て、埃塞の問題は頓て露佛同盟と三國同盟との紛争を惹

起するを危懼し、列強は該問題を可成埃塞兩國間に局限して解決せしめんとし居るも、埃國の要求過激なるより、先づ英國の如きすら之を非難し他は何れも此の調停の任に當る丈の餘裕ありや否や、露獨の態度如何に依りては由々敷重大問題となるべし云々

以上を以て巴爾幹半島の生んだ妖雲の正体は略ぼ解剖せられた。彙縁錯雜せる列強の關係、到底其のまゝではすまされぬのである。

飛電あり曰く「駐埃セルビア公使は埃國首都ウキンナを引上げたり」と。

飛電あり更に曰く「埃地利匈牙利には戒嚴令布かれたり。而して聯邦議會及び埃

匈兩國議會は既に閉會せり」と。

偶々其首府ベルグラード市に歸還の途にあつたセルビア參謀總長プトニツク將軍は、匈牙利に於て埃政府官憲のために捕はれたとの消息がセルビアに傳へられ、同國民は愈々昂奮した。

斯くて妖雲の活動、益す濃厚を加ふ。

(三) 獨帝微笑めり

埃國はセルビアに對して宣戰の布告を試みた。

而して之れと同時に埃國老帝フランツ、ヨーゼフ陛下は、其の國民に詔勅を發して曰く

朕は斯る高齡に於て尙ほ不俱戴天の警たる塞國の犯罪行為と、暗殺陰謀並に絶間なき其の煽動を抑壓せんが爲め、干戈を動かさざるに至れるを遺憾とす。而して平和を維持せんと試みたるも成功せず、遂に事を兵力に問ふの已むなきに至れり。朕は正道を踏んで進むべく且つ忠君愛國の心に富める朕の國民が、必ず國家の爲め最も大なる犠牲を供すべき決心あるを確信せるものなり。埃匈國々民の眉は昂り、而して其の腕は一齊に鳴つた。

埃軍は二十八日、埃塞國境を流る、ドナウ河を渡つた。

セルピヤ首都、ベルグラードは埃軍の熾んなる砲撃を受けた。

ベルグラード危険のため、其の都は遙か南方ニシユに移された。

ベルグラードの南方なるスメデレオヴ附近に於て埃塞砲兵戦は開始され、砲聲は
般々として凄し。

斯うした血腥い戦報が、櫛の齒を引くやうに全世界へ傳はつて間のない時、露國
政府は獨逸政府に對し愈々正式に自國南部國境に於て二十八日動員をなしたる旨の
通牒を發した。それは七月三十日のことであつた。而して之れと同時に露國の決心
如何に就て當時外交交通の頻りに唱道した處は、

埃塞兩國の開戦に伴ふ歐洲列強の危機は容易に端睨すべからず、隨つて其の
前途推斷し難しと雖も埃塞の戦争は尙或程度まで開展すべきが如し、元來埃國
と塞國との戦争をして單純なる兩國の關係に止まらしめんか、人口、兵力及び

財力の諸要素に顧みて塞國は到底埃國の敵にあらず必ず一撃の下に破碎せらる
べきなり、然るに猶干戈を執つて立ちしは背後に露國在るがためのみ、然も埃
塞の宣戦に於て條理あり其國民激怒して膺懲を加へんとするに對し之が程度の
如何を究めずして直ちに兵を動かし塞國を援助するは露國の敢てし得べきにあ
らずと一般に觀測せられしに、突如動員を行ふて塞國を援助するは要するに深
き外交的意味の伏在するためならんも之れがため今後遂に露國の大衝突を來た
して歐洲の天地を震動するの秋あるべし、露國が此の一大決心の下に臍を固め
て戦備を整へしに拘らず裏面に巧妙なる外交手段を取り夫の英露協商若くは露
佛同盟を利用して暗に獨逸を掣肘し、更に埃國を牽制するに汲々たるを觀ば、
埃塞兩國の戦況今一步を進めたる必要の時期に於て干渉的調停を目的とする列
強の協商會議を見るに至るにあらざるか、英國今尙熱心に之を企圖しつゝある
は單に英國の發意に依れりとすべからず、乃ち露國も亦窃に與つて力ありと觀

測せらるゝ者あり云々。
 と云ふにあつた。露の動員は餘りに早計であるといふに外ならない。而し、露は之れに耳を藉すの違もなく、更に五十二州に亘つて軍備を整へ、鐵道乃至ウチルガ河の船舶を以て内地の軍隊を頻りに西方へ輸送するなど、刻一刻と軍國の状態に入りつゝあつた。

妖雲、漸く全歐に漲溢せんとす。

此の時に當り、英國政府は該戰爭の區域を局限することに努力し殊に其外務大臣サー、エドワード、グレイ氏の如き、二十七日の下院に於て、「埃國が塞國と戰爭を開始せる一方、露國が一部の動員を行ひたるも他列強は幸ひに未だ之れに適應せる措置に出でざるは欣賀すべきことにして、我が英國は依然歐洲平和のために盡すべ

し』云々との意味の演説を試みて上下民心の喝采を博し、反對黨の機關新聞の論調をすら賑はしたのであつた。

而して二十九日の英紙タイムスは、英國の輿論だと稱して大要左の論説を發表してゐた。

英國政府及人民は、歐洲戰爭の全世界に對する影響及平和維持の的確唯一の方法は、若し友邦にして戰爭を餘儀なくせられたる場合に英國は極力之を援助すべき旨を聞知せしむるにある事を了知せり、吾人は何等利己心あるにあらず、吾人は埃國塞國間の争ひ公正なるを欲するの外何等直接の利害關係なし、歐洲に於ける勢力の均衡を保つ事は英國の國是なり、之が爲には吾人は佛國と提携して又佛國及其同盟國と更に擴張されたる提携を爲せり、今後如何なる事態の發生するとも吾人は過去同様此提携を維持すべし、吾人は又歐洲諸國の政府及人民の被るべき慘禍を避けんが爲めには、如何なる盡力をも厭ふ所にあらず。

ず、若し此等の努力にして無効に歸する曉には英國は友邦と行動を共にすべし云々。

其の論旨は、眞に正々堂々、國際的道義に基く明々白々の獅子吼であつた。忠實なる平和の保護者であつた。

然るに、一方獨逸では同じ二十九日の深夜、ポツタムの宮殿に於て御前會議を開會し矛を執る準備を整へたのであつた。

ほ、笑めるカイゼル陛下！
野心勃勃のカイゼル陛下！

自ら大奈翁を以て任じ給ふウキルヘルム第二世カイゼル陛下は、豫ねて其の横溢する霸氣に驅られて歐洲全土の統一を夢みつゝあつた。そして、機會だにあらば、起つて其の精銳なる——練りに練られし精銳なる陸軍を提げ、軍馬の手綱を縦横に操らんと希望を有せられた。偶々、塞嶼の國交斷絶して兵馬の交へらるゝこと頻

頻、而も突如、露の起つて塞を援助せんとし既に動員を行ふて嶼に敵意を示すのみならず、嶼の同盟國たる獨逸政府に向つて正式の動員通牒を發したてはないか。英の平和主義、遂に何んするものぞ！ さなきだに血の氣の多いカイゼル陛下の全身の血潮は、モウ泡立つほどに躍動せざるを得なかつた。

『雄圖伸ぶの秋！』

長劍を按じて斯う咳やいたカイゼル陛下の其の緊張した風貌には、底氣味の悪い程、澄し込んだ凄しい『ほ、笑み』が繰返されたのであつた。

御前會議も、まどろかしいまでに、彼れは昂奮状態にあつたのである。而して、彼れも口に、平和を、唱ふる一人であつた。先づ順序として

『獨逸政府は戰爭の止むを得ざる場合には、嶼太利と行動を共にすべし云々』
此んな手緩い、形式なことを聲明し何處までも勃々たる野心を、最も拙劣な

虚偽を以て飾らうと努めたのである。されば、彼の平山成信氏の如きも、獨逸の眞意を幾分誤信し、當時此んなことを昵近者に語つたといふ。

最近の伊土戦争に於て獨逸の勢力は土耳其に伸び、又たバクダット鐵道を通じ、小亞細亞を其手中に收めんとする獨逸帝國が虎視眈眈々歐洲大陸に覇を唱ふるの機を窺ふや久し、今回の埃塞開戦に當り極力埃國を援助せんとする故なしと云ふべからず、此際露國が同人種たる塞爾比を見殺しにすることあらん乎巴爾幹半島に於る露國の權威を失墜すべく、加ふるに獨逸は日露折衝に際し、露國を煽動して日本と兵火を交へしめ其間自國の勢力を巴爾幹に扶殖せる狀況もあり、獨逸の狡慧なる行動は露國人の常に憤激する所なれば、今回露國が大動員の計畫を爲したるは獨逸と決戦するの眞意ならんも保すべからず、而して露國と協商せる英國は、進んで列強會議の開催を主唱し、獨逸の之に應ぜざるに及ばず勢ひ兵力を以て獨逸に迫るべく、獨逸に宿怨ある佛國亦た英國に加擔

し、遂に露國を援助することゝならん、斯くて獨逸は佛露の挾撃する所となり海上更に英海軍の攻撃を受くることゝなるべし、但だ獨逸が陸軍の強大を誇りつゝ在るも、露國の陸軍は日露戦争の經驗を経て改良したるものなれば、其の將卒の精銳なる恐らく獨逸を凌駕するものあらん、然るに拘らず獨逸は英佛露の三國を相手に飽迄戦はんとする乎、況んや伊太利は三國同盟の側より獨逸に加勢すべき筈なれど、其人種は佛國と同じく羅甸人に屬し、埃國との政治上の關係亦た圓滑を缺くものあり、斯る状態なれば縱令獨逸に野心の満々たるものありとするも結局は英佛露の三國に屈し、埃太利を緩和せしめて歐洲の平和を計ることゝならんか云々。

斯うした噂の區々たる中に、早くも獨逸政府は其の首都ベルリンに戒嚴令を布いた。而して、三十一日夜より八月一日夜にかけ愈々動員令を下したとの噂が高まつた。次いで、獨逸政府は露國政府と露國と締盟せる佛國政府の二ヶ國へ同時に最後

通牒を送つた。間もなく露國へ宣戰を布告した。火のやうなカイゼル陛下は、客氣に任せて斯かる火のやうな敏活の態度を執つたのである。そして、動員下令の一夜、自ら宮殿の物見臺に出御せられ、折柄山の如く蟬集せる群集に向つて演説して曰く

『今は獨逸國民に對する重大の時機なり、然れども今日は未だ平和維持の最後の時にあらず、朕は此刀と名譽を以て、再び鞘に收めん事を希望す、戰爭は財産と血液の多大なる犠牲を要求すべし、然れども我敵國たるものは、獨逸に對し攻撃を加ふるの何者たるかに思ひ至らざる可からず』云々。

と痛憤し、最後に皇帝自ら『忠勇なる獨逸軍隊の爲め、神の援助を祈る』とて數分間の祈りを捧ぐるや、黒山立つた群集は、等しく熱狂したとある。芝居氣澤山な其の態度と、群集心理を煽るに巧みな其の語調と、用語とは、埃國老帝が開戰の際に當つて國民に下された勅語以上に、國民の血を湧かしめ、其の骨を鳴らしめた

ことであらう。而して、

『此の露國に對する憤怒は、千八百七十年に於ける佛國に對して味ひし我が獨逸の憤怒よりも更に大也』
と、群集をして一齊に絶叫せしめしも決して偶然でない。

聞け！ベルリンの空を威壓して轟く群集の國民的意氣の聲を。
●●●●●
カイゼル陛下は又も『凄いほゝ笑み』を禁じ得なかつた。

(四) 賢か愚か獨帝

獨逸政府の最後通牒を接受した佛國政府も亦た、八月一日夜、果然其軍隊に動員令を下した。

斯くて花の都の巴里は、劍光帽影、殺伐の巷と化しさらんとする。
歐洲全土、今や將に戰雲漠々！

さのふまで、文明の民、平和の保護者として誇示した彼れ西歐人士も、斯うした
經過の下に全歐擧げて亂れに亂れんとし、幾多の犠牲と、幾多の年月を要した彼等
の文明を彼等自身に於て先づ破壊し、先づ呪咀し、遂に平和の攪亂者たり終らんと
すといふ事件は、餘りに異變に失するため、人も吾も、殆んど云ふ處を知らない。
文明は眞に虚偽だ。虚飾だ。

局外嚴正中立を守つてゐる國々が、此の千古未曾有の大活劇の凡てを見違すまい
と努むるは勿論、塞塊の兩國は、戰局の餘りの擴大に今更ら意外の思ひを繰返して
ゐる時、彼の怪物カイゼル陛下は、持前の火のやうな性急な方寸に基いて、頻りと

兵馬を

『佛蘭西へ！佛蘭西へ！』

と進めたのであつた。

露の勇敢な陸軍は眼を据えて獨の背部を覗つてゐる。

獨の百萬の將士、如何に精銳であらうとも、敵對國は二三にして止まらぬ。而も
普佛戰爭の敗衄以來、獨に對して拭ふべからざる憎怨を有する佛蘭西を前に叩へ、
背部には日露の役に於て實戰の苦味を嘗め改良に改良を加へて今や世界有數の陸軍
なりと傳へらるゝ露西亞が、爪を磨いて待つてゐるのだもの、餘程の自負心がなく
ては兵馬を驅り而して其の士氣を鼓舞すること不可能だ。

然るに、自ら陣頭に起つて三軍を叱咤、大に努めつゝあるカイゼル陛下は、其の
胸中如何んの成算を有する！
賢か愚か。

凡か非凡か。

大奈翁の長所を解せんとして其の短所を得たる鍍金の人物か。否か。

疑問は、今回の歐洲動亂に對して、彼れの執れる態度に依り、愈々濃厚と深味を加へたのである。

彼の小大隈伯を以て任ずる早稻田の永井柳太郎氏は、カイゼル陛下を論じた其の節に曰く

カイゼルの缺点是時勢を知らざるにある。カイゼルは常に自己の爲さんと欲する事のみを考へ、是をなす可き時代が如何なるものなるかを顧慮しない。ビスマルクが其の志を遂げんとするや、先づ其の時代を考察し其の要求に乗ずるを常とした。然るにカイゼルは時代の要求を無視し、常に自己の志す處にのみ是れ急である。カイゼルが口に世界政策を論じ、馬を列國に驅り、野心を伸さんとするも、常に失敗して益々窮地に陥入るのはこれが原因である。曩に南阿

戦争の起るや、クルウゲールに祝電を發し英國の反感を買ひ、黃禍を唱へて日本の同情を失ひ、自己の目的をのみ考へ、周囲の事情を顧慮せず、馬車馬的に事を行ふの結果は遂に今回の如き大失敗を招くに至つた。ウキルヘルム大帝がプロシヤを率ゐて歐洲に臨むや、外交に於てはビスマルクに聞き軍事に於ては大モルトケの扶けを乞ひ、一事を行ふに尠くとも數年の準備をなし始めて之を行ふの堅實なる方法に據つた。然るにカイゼルに至ては自ら用ふる事甚だ厚く外交も之を自らし、軍事も之を自らし、ウキルヘルム大帝とビスマルクと大モルトケとの事業を一身に兼ね、しかも前後を省みずして、其の野望を一氣呵成に行はんとする、是れ今回の大過失を生んだ所以である。

要するにウキルヘルム大帝がビ公と大モルトケによりて築ける、大帝國は自ら以上の三者を兼ねると自信せるカイゼルの妄想によりて、其の根抵より覆されんとするに到つた。敢へて謂ふ、彼れカイゼルは外交上の未成年者に非ずし

て何ぞ。全く未成年者である。云々

今度交戦國になつてゐる某國の一通信記者は左の如きカイゼル陛下論を發表してゐるが、陛下の面目を側面から觀察した興味あるものではあるまいか。

露西亞は專制國だが、ポヘドノステエフ、ツイツテ、ブレウエ等の重臣が政治の責任を負ひ露帝一個の意見が政治上に現れる事は滅多に無い。然るに立憲國の獨逸は全く獨帝の專制で、帝は『獨逸國民には只一つの意志があるだけ、其意志とは即ち朕の意志だ』と極め込み一切萬事自身で專斷されるから宰相大臣等は飾りものに過ぎぬ。是程の帝だから無論才氣も手腕もあるがシヨツペンハウエルが云つた通り『人は智慧よりも意志に支配される』から、意志許り雄大で智慧がソレに伴はぬ人の行動は餘程危険だ。全体日耳曼人の性質は蘇格蘭人の通りに純潔、質朴、周到、熱誠、忍耐に富んで居るのに獨帝には微塵も此等の性質が無い。其の代りに派手な空想や、邊幅の修飾や、名譽の渴望などに富

み多辯で輕はづみで進退に標準の無い事は羅甸人其儘だ。純獨逸人の血統に生れて居る獨帝にドウしてコンな女性式の虚榮家が出来たのか、遺傳の學説も當には成らぬ。

随つて帝の移り氣は、極端で破れ靴の様に棄てたピ公が死ぬと帝は打つて變つて『朕は朕の祖父を喪つた時と同様の悲痛を感じる』とピ公世嗣へ發電する流儀だから、大臣杯は唐突頻繁に取り更へ何等の権力も與へぬ。ソレが不平で辭職した大臣も少くは無い。即ち帝は獨斷で勞働者保護を案出しピ公の副署無しに列國會議召集の勅令を發したのでピ公の肝癢玉は破裂した。膠州灣租借も獨斷だつたから宰相ホーヘンロー公は辭職したのである。獵官其他の運動者は今迄は大臣の門へ集つたが大臣は無権力だから帝室へ潜り込み帝は是等無位無冠の野心家に取り捲かれる。勿論移り氣だから野心家個々の寵愛は永續さはせぬが信任のある間は彼等の意見が帝を支配する。君寵が次から次へと移る毎に

政令が變る始末で、時としては學校教師や芝居の持主輩迄が帝を支配したとは驚き入る。

日耳曼族は本來自由主義だから、獨帝の專制に對抗する學者や論客もあるが帝は一切耳を貸さぬ。剩りに威壓と懷柔で獨逸の新聞界に獨立のものは一社も無いから帝は益々勝手次第の言動を試み或る兵營の落成式に臨むと

『若し伯林市民が一千八百四十八年の様に王に謀叛するならば汝等は直ちに銃で之を討ち平らげよ』

と演説し他の場所では兵士に

『汝等は元帥の命令に對し理由を問ふては成らぬ。何事も盲従が第一義だから

若し元帥が汝の父母を殺せと命令したら即時にソレを斷行せねば成らぬ』

と迄發展された。勿論是等の演説は獨帝大嫌ひの社會民政黨に對する示威の爲めとか、戰場で水火の中も辭せぬ勇氣を鼓舞する爲めとか其れれ、理由のある事

だらうが、獨逸人は之を聽いて非常に惡感を起し上流も下流も憤慨したとはさもあらう。

多方面の獨帝は又萬能の自信が強く、外交、内治、陸軍、海軍、教育、宗教から美術、繪畫、建築、其外一切の事に於て皆自身が最高のオーソリティーだと思つて居られるから、何事にも干渉し、第一回は大多數第二回は滿場一致で當選した伯林市長の任命を拒んだり、或る幼稚園で噴水の設計をすると『朕は左様なものは好かぬ』と云ふ理由でソレを許さ無かつたり、シルヘルの文學に關する賞金を與へることを拒み、獨逸第一の脚本家ハウプトマンの劇作を排斥してホーヘン家に媚びた愚にも付かぬ封建時代劇を帝室の補助を受けて居る劇場で興行させたり、又は伯林に御寺を澤山建てたい爲めに三百年前に一度實行した事のある伯林市の人口増加に従ひ、一寺院を建てると云ふ法律を適用し様としてトウ／＼行政訴訟が起り、帝室の敗訴に歸すると云ふ様な始末で、帝の政

治は全く出鱈目且無方針だから、獨人は之を信用せず近年迄八十萬人であつた社會民政黨が近頃は三百萬人に激増した。

次に外交の方はと見ると帝は懸命に領土擴張に熱心して居られるけれど、即位以來今日迄に少し許りの殖民地が殖えた丈だから、帝の功名心に満足が無いのは勿論で、無法に陸軍を増し海軍を擴張する上に、多辯で秘密を守らず、鳴物入りに物騒な真似をするから何事にも手を出さず割合に實收は少い。ソレで御世辭は却々旨いが沙翁の云つた『私は私の笑顔の下に藏して居る敵意が露はれる迄は平和を口にします』の警句の通て列國は勿論帝の同盟國さへ獨逸の外交を信用し無くなつた。獨逸の今日は佛國第二帝政時代に能く似て居るが、獨帝其人も亦第二帝政の主人公ナポレオン第三世にソツクリだ。ピ公は三世を評して

『三世は常に獲物を欲がり、自身も亦正直な仲買人の役目を年中勤めて居たが

外交と詐欺とを混合した舊伊太利式ペテン家の弊に陥つた其政策は、一寸旨く思ひ付かれて居るが實は空想に過ぎないから、自身の空漠な功名心の爲に二十年間歐洲に不安を感じさせ、才智は逞しいが實用に適しないのに自信の念許り強く種々の事を企て、自ら苦み佛國の隆盛を計るのに行届いて居たが、トウトウ其身を亡し國を誤まつた』と云つた、之れはウキルヘルム第二世にも適用すべき評である。

世界の危険は獨逸で英米露佛に軍備を増させる上に獨逸の識者も前途を危ぶんで居る。處て獨逸は三國同盟の繼續に誇つて居るが普佛戰爭の前にナポレオン第三世は埃伊丁の三國は無論佛の味方で同盟にも及ばぬと信じて居たのに、全然孤立した通り一旦危急の場合三國同盟が獨逸の保障に成るのは疑はしい、随つて先頃の同盟繼續も實は瞞看手段で無ければ形式に止まり同盟の繩は最早や緩んで居る云々。

カイゼル陛下は、永井氏の所謂『時勢を知らざる』迂人か。果た、外國通信記者の所謂『出鱈目、且つ無方針』の彼れ是れ家か。賢か愚か。

戦局の推移に伴ふ其の今後の政策と方針とは、詐らざる彼れの真面目を呈露したものであらねばならぬ。

其二 同盟國起つ

(一) 見よ、其義氣と任侠を

果然、八月一日を以て歐洲大戦争の序幕は開かれた。

そして、飛電頻りに傳へられた。

曰く『露獨開戦の第一弾は、八月一日午後露國國境偵察隊によりて放たれたり、砲

火を受けしは國境を距る三百碼たる獨逸プロストケン附近に於ける獨逸偵察隊なり
獨逸偵察隊は之に應じて發砲せしも互に死傷を出さず』

曰く『獨軍は佛蘭西のシレーに侵入せり』

曰く『佛獨國境のナンシー附近に於て、佛獨大激戦あり、二萬の獨逸兵は佛軍の
ために撃退せられたり』

曰く『露軍の斥候隊はポーゼン州ヤロチン及びウレッツチンを通ずる沿線上のアイ
ヘリリド附近に架せるワルテ河の鐵道橋梁に向ひ砲撃を開始したるも獨逸軍の爲
めに撃退されたり、其際獨逸側にては輕傷者僅に二名ありたるのみなれども露國側
の損害は不明なり、又露軍がミロフラフ停車場に對する計畫も妨害せられたり』

曰く『砲兵を有する露軍の稍長大なる一縱隊は、ピアラの東南方なるシウイベル
ン附近に於て獨逸國境に侵入し、哥薩克騎兵二個中隊はヨハニスブルヒの方向に進
行中なり、而してルイク、ピアラ兩地間の電話線は不通となれり、之に依つて見れ

ば露國は獨逸帝國領土に攻撃を加へ以て戦争を開始せり』
 以上は八月一日午後から二日未明へかけて試みられた戦報であつた。要するに其の開戦の第一着に於て、獨逸は露佛の兩軍を腹背に受けたのである。殺氣早くも低迷す。

又た一方では此んな飛電が別な方面の戦況を齎してゐる。

『埃塞兩國の戦争は徐々に進行しつゝあり、塞軍はドナウ河の後方に主力を集中して埃軍の渡河を待ちつゝあり、然れども埃軍の一部は既に塞都ベルグラードを占領せり、而して塞都占領の日、埃國セラゼボ附近に於て露軍の一部隊と戦闘起れり』

此の時に於ける英國の態度は何うであつたらう。英は實に露、佛と共に所謂三國協商に基く締盟國の一であつたのである。當時我が外務當局者は、英國の心事を付度して斯う云つてゐた。

『埃塞兩國間の戦端の擴大し來らば、獨埃伊の三國同盟と、露佛英の三國協商との戦亂を惹起すべしとは一般に豫想せられたる處なるが、外務省に於ける各方面よりの報告を綜合して稽ふるも、伊太利は同盟國の埃國とは單にトリエスト市に於ける葛藤事件のみにはあらず、各種の利害關係を異にし居り歴史的に反目し居る事實あり、且つ伊國は佛國との關係よりするも愈々戦亂とならば中立するに至るべしと豫期するものあれど英佛露の協商は意外に強硬にして既に香港に於てすら英國官憲は商船の武装までも爲すに至りたるを見ても三國協商は其結合も亦強硬なりしを思はしめ、形勢は依然として險惡状態にあり、當局は今後英國が果して如何なる態度に出づべきか豫言する事能はずと雖も英國は最初より強硬なるも出來得る限り平和的解決を希望し居れり』云々。

然り、英國は『平和主義』のために最善の努力を盡した。けれど、大厦の倒れんとするや、一木の能く支ふる筈がない。

英は、遂に最後の決心をした。

獨、佛、埃、塞、露の五列強の空に、頻りと砲火の轟く八月二日、英國政府は重要閣議を内閣に召集し慎重熟議を試みたのである。而して其の上下民衆は、少數の中立主唱者を除いて他は悉く『佛國を援助せよ』と絶叫し、輿論轟々たるものがあつた。

『英國政府は佛國を援助し提携の實を擧げざるべからず、然らずんば德義上の義務に違反し、威信は地に墜つべく獨逸の戦勝は英國の衰亡を意味し、延ては英國の安危にかゝり、到底中立を守る事不可能なれば、政府は直ちに動員し佛國と行動を共にすべし、而して英國の利害は、歐洲均勢、和蘭白耳義の獨立保全及び英佛海峡の安全にかゝれり、佛國一度北方に敗れば獨逸は直ちに海峡を脅し、英國の遅れ馳せの行動は其効なかるべし、英國は自衛の必要上此の際速に全力を擧げて戦ふの準備を爲さざるべからず』

這は、當時英國に於て發行せる有力なる諸新聞の論調であつた。斯くて、大勢は既に定まつたのである。英は時局紛糾の當初以來、平和主義宣傳の爲めに忍耐と持重とを以て事に當つてゐたけれど、其の最善の努力の破るゝや斯くの如く上下擧つて戦闘参加を主唱し、若し拒むものあらば之を一蹴し去らんのみを概を示した。且つ其の動機は、佛國と提携の實を擧げんといふ德義上の理由に發して居る。其の任侠や美しく、其の義氣や清し。

(二) 兩帝の交驩今や昔語

山雨將に到らんとして風樓に滿つ。

此んな日が、一日二日續いて國民の心の緊張し切つた時、愈々英國政府は獨逸政府へ最後通牒を發した。而して其の満足なる回答の來たらざるや、政府は直ちに五千萬磅の軍事費を議會に要求し、一方其海軍豫備兵に召集令を發した。ロンドン市

民は熱狂する。國民的示威運動は開始せられる。『平和の國』は、忽ち『軍國の意氣』を示すに至つたのである。

英國政府が正式に獨逸政府へ向け宣戰の布告を發したのは八月四日であつた。獨逸政府は、無論直ちに之れを甘受すると共に、自己も亦た、英國政府へ宣戰布告をなしたのである。斯くて兩國の國交は遂に破れた。

獨の陸軍！

英の海軍！

其の精銳と精銳が砲火劍戟を交ふる處、眞に是れ龍攘虎搏、モウ聞いたゞけて血潮の躍動と筋肉の緊張を覺えぬわけにはいかない。

『英領北海のフラムボロー岬方面に方りて般々たる砲聲聞え、大海戰開始せられつゝありとの報倫敦に傳はる、多分英獨兩艦隊の交戰せるものならん』

英獨兩國の宣戰の布告をした四日の午後、モウ此んな外國電報が我が日本へ傳へ

られた。一方では、獨逸艦隊が同日キール運河を通過して北海に入つたとの情報もあつた。而し餘りに唐突なので聞く人の多くが何れも半信半疑であつた。六日に於ける我が外務省は四日英國外務大臣より駐英日本大使を経て左の意味の公報の達したことを發表したのである。

『英獨兩國は今や交戰状態に在り』と。

英國の海軍か、海軍の英國かと云はれるまでに英國の海軍は、●●●提督以來著名なものである。其の著名な、精銳なる英國艦隊に對し、苦もなく敵對行爲を執るに至つた獨逸艦隊は如何程の實力を有するものだらう。それは最も秘密にされてゐる處で詳細に窺知するを得ないが、日本に關係の深い同國東洋艦隊の實力に就て當時此んな説を公にした我が帝國の海軍將校があつた。

『東洋に於ける獨逸艦隊は巡洋艦隊と稱へ、四隻の軍艦を持て居る。シヤルホルスト、グナイゼーノールの二艦は我日本の筑波型の裝甲巡洋艦、其他の二隻は

二等巡洋艦であるが、此二隻は今東洋に居らぬかも知れぬ、其の外獨逸には膠洲灣に屬して居る數隻の二三等巡洋艦、砲艦、驅逐艦等があり、尙ほ濠洲のサモワ(獨領)を根據地として二三隻の三等巡洋艦、砲艦等がある丈だ」云々。更に我が一軍事通は獨逸海軍の作戦を揣摩して曰く

「露佛英の三大強國を敵として乾坤一擲の輸贏を決せんとする獨逸の作戦が、如何に神籌妙算を藏し居れるや得て窺知すべからずと雖も、専門家の戰略眼より觀察して、獨逸が先づ佛國を侵略し、之れを征服したる後全力を擧げて露國に當らんとするの一般方略を有することは大体に於て推知するに難からず、而して佛國を先攻するには白耳義の領域を侵して之を進路とし、一氣に巴里に向つて殺到するを最も捷徑とするが故に、獨逸は今や白國の中立を無視して作戦上の便宜に資せんと焦慮しつゝあり、而も白國の中立を保障し居れる英國は其責任上獨逸の暴狀を坐視せざるべく、隨つて若し英國の陸軍が大陸に向つて輸

送せらるゝことありとせば、开は必ずや白國の中立保障と獨軍の進路遮斷の意味ならざるべからず、而して獨逸の海軍は元來陸軍の作戦に資する意味に於て運用せられ居るに過ぎざるを以て、今回の大戦に於ても海軍が獨立して海上の活動をなすことはなかるべく、大陸軍の作戦の爲めには恐らく何時にても海軍を犠牲とするを辭せざるべしと信ぜらる、即ち獨逸海軍は單に敵軍の集中妨害乃至牽制の意味に於て露國の沿岸威嚇をなすに努むべきも、堂々陣容を整へて英艦隊と雌雄を決するの壯舉には出で得ざるべし」云々。

而し、此の觀測は外れた。——獨は、十人が十人、英と比して貧弱なりとなす其の艦隊を以て、愈々英に向つて而も猛烈なる火蓋を切るべく身構へ、諸般の戰闘準備を整へたのであつたから、その海戰の初頭に於て不幸榮譽ある英國海軍は麗はしき其の歴史に一抹の汚点を印したのである。——それは、英獨兩國宣戰布告の翌朝たる五日未明のことであつた。北海に於て游弋してゐた英國二等巡洋艦アンフオ

ン號（五千三百噸、六吋砲入門を有し速力二十五海里）は、獨逸軍艦の敷設せる機械水電に觸れ、哀れ沈没の憂目を見たのみならず、乗組員中主計一名及び下士卒百三十名即死、他は幸ひにして救助せられたけれど、爆破した水電の破片に非業の死を遂げた百三十一名の鮮血は、北海の波も變はるかと思はるゝまでに凄慘なものだつたといふ。

開戦劈頭の不覺！

英國上下民衆は等しく切齒扼腕した！

そして、『復讐！復讐！』と絶叫した。

今や戦機刻々に熟せんとして北海の洋上に雌雄を決せんと努めらるゝ英、獨兩皇帝陛下の御心事、昨日まで姻戚として親交あつただけに、一入感慨の深いものがあ

らう。——即ち英國皇帝ジョージ五世陛下の御叔母君は獨逸皇帝ウキルヘルム二世陛下の御母宮であり兩帝は所謂從兄弟の間柄であつた。さればにや、過ぐる一千九百十三年、英帝は親しく獨逸に獨帝を訪れ、其の交驩の印として英帝は獨帝の陸軍服を、獨帝は英帝の海軍服を互ひに召し替へて心から握手せられたではないか。斯くして交驩の状を親しく拜した兩國國民は、『平和』のため大に祝福し、且つ大に欣躍したではないか。

交驩！噫、何んの意ぞ。

其三 戰雲漢々

(一) 巴里か！伯林か！

海に硝煙漲り、陸に砲彈轟ぎて、歐洲全土之れ悉く朱羅の巷

獨、埃と共に所謂三國同盟の協約を締結せる伊太利は未だ起たぬ。獨、佛交戰國に介在する白耳義は逸早く中立を宣言した。——而し、伊は埃、獨の爲めに何時矛盾を執つて起つかも知れない。殊に耳白義の如き、中立を宣言すると同時に四日午後其の國王陛下は上下兩院に勅語を下賜せられて曰く

『若し吾國への侵入を防がずんばある可からずとせば、吾人は既に武裝を整へ何時にても最大なる犠牲を拂ふ可き用意成れり。茲に不屈の精神を以つて頑強なる抵抗をなし、吾國の至高なる安寧を護らんが爲め、國民の相結合するは吾人に課せられたる義務なり』云々。

斯うした勅語の意が、白國の國民の悉くへ未だ傳はるまいと思はるゝ四日の夜早くも『獨軍は白耳義へ侵入せり』との公報が我が外務省へ到着したのであつた。中立國へ軍隊を驅り而も當るものゝ如くを難き立てんとの氣勢を示す獨軍の態度、それは國際法を無視した同斷な行爲として列國の等しく擯斥した處であつた。而し

血に飢した野猪の如き獨軍は雪崩を打つて白國に侵入し、其の要塞リエーヂュを襲はんとした。

白國は起つた。

今の先き、皇帝陛下より賜つた聖旨を奉体して、實に猛然と超つたのである。——斯くて、白獨は初めて此處に干戈を交へた。當時我が外務省へ達した該戰況の信ずべきものとしては左の如きものがあつたのである。

第一報『白耳義軍は獨逸軍の攻撃に應戦しリエーヂュ附近に於ける獨逸軍の襲撃に對し、悉く之を撃退せり、要塞は事實上毫も損害を受けず』

第二報『フロン附近に於て白獨兩軍の激戦あり、獨逸軍は完全に撃退せられ、再びリエーヂュ要塞を攻撃するの力なきに至れり』

第三報『獨逸軍の白獨激戦に於ける戦死者は八千にして、大砲七門を鹵獲せられ、負傷獨逸兵八百人はブラツセルに着したり』

列國は、小なる白國の將卒の勇なるを等しく驚嘆したと共に、口程にもない獨逸陸軍の怯弱と、そして其の作戦の拙劣とを等しく慢罵し、且つ呆れたのであつた。當時我が陸軍某將校は戦局の推移を豫測して曰く

『最近の情報に依ればリエーヂュ要塞を攻撃せる獨逸軍團は、多大の損傷を蒙りたるも依然之が攻撃を續行し居れるが如し、今作戦の上より觀るに、獨軍の要塞攻撃は恰も我日露戦役に於ける得利寺戦に伯仲せるものあり、即ち我軍にして萬一得利寺戦に失敗せんか、金州半島に於る將來の作戦は非常に困難を感じたるべし、之と等しく獨軍にして一舉り要塞を攻落せば、右翼即ち白國進入軍の行動は着々として進歩し、獨軍主力の行動作戦上非常の利便を與へたるに、事實り要塞に於ける獨軍の攻撃は意外の失敗を招き、今尙之を攻落する能はざるは獨軍今後の作戦上に非常の打撃を與へたるや論なし、然れ共素獨軍の佛國侵入は國境より大軍を進入する能はざる事情あるより、其一部隊を以て比

較的防備の薄弱なる白佛國境方面より佛軍の左側背を突かんとする非常手段を採りたるものなれば以上の目的は容易に之を變改せざるべし、従つてり要塞攻落の上は該要塞を利用して侵入軍は漸次マース河に沿ふて佛境に肉薄すべきが其通路に當り尙り要塞に等しきナミユール要塞あるを以て、茲に再び第二の衝突を見るべく旁々該軍の佛國侵入迄には、佛軍の行動如何に依り此間尙尠からざる時日を要すべし』云々。

右意見中にも見られる如く、獨逸軍隊が白國侵入の所以は、十八萬の白國陸軍を敵とせざる可からざる而已ならず、更に中立侵犯の結果英國を敵とするの不利益あるも、獨佛國境の延長里程は僅々六十里内外であり、且つルクセンブルグ方面よりは到底大軍を進入する能はず、例へば獨逸の侵入軍を百萬と假定し一人の幅員一米突を要すとせば、即ち全軍の通過には尠くとも一百萬米突(約二百卅里)を要し、殊に防備の完全な國境方面よりの進入は殆ど困難なる事情ある處から、獨軍は茲に

已を得ず白耳義を通過し以て比較的防備の薄弱な方面より一舉巴里に迫撃せんとする戦略を採つたものに過ぎないのであつた。而し、弱しと見た白國軍隊が意外にも矛を執つて容易に降らざるのみならず動もすれば其進入軍を國境外へ驅逐し去らんとする。茲に於て獨軍は其の意外に驚異の眼を睜るといふよりも、『強し』として世界に誇つた自己の陸軍の尊嚴を冒瀆せられたのを非常なる遺憾とし、茲に更に大なる而して一層強固な敵愾心を白國へ傾けるやうに至つた。

果然、獨帝カイゼル陛下は九日其の大本營を白獨國境に近いアクス、ラ、シヤベルに進められ、帝、自ら振はざる味方の士氣を鼓舞するため、馬上頻りに指揮刀を閃めかし玉ふことゝなつたと傳へられた。

—— 一体カイゼル陛下は目下頭の押へ手が無いから惜しいものである、陛下は元來が餘りあせり過ぎる寧ろ猪勇と云ふ風があつていけない、名は忘れたが獨逸の前々の參謀總長も曾て手酷しく陛下を批難した事がある、或時の演習に

陛下は自ら騎兵旅團に將として演習に参加された事があるが餘程無法な遣り方をされたものと見えて同參謀總長の講評に『演習であるから此の騎兵旅團は無事に歸つたけれど、若し實戦ならば必ず全滅である、陛下にして若し此の講評が御氣に召さずば臣は佩劍を解いて陛下に献じます(辭職の意味)』と云つた、流石のカイゼル陛下も只沈黙して居られたとの事であるが、カイゼル陛下の戦法は凡て此の如し、陛下は餘り戦は上手でない様で罷り違ふと敗衄の憂目を見てアノ御性分では或は自殺と云ふ様な悲壯な最期になりはせまいかと察せられる、併し獨逸の遣り口は今日迄餘り遣過ぎたので今は各國の憎まれ者になつて居るから、敗衄は却つて獨逸の爲にならう——云々。

曾て此んな噂を我が陸軍の樞要の地位にある人は語つたとのことであるが、此の一片の挿話に依つて窺ふても、『獨軍破る!』の悲報に獨帝が如何に焦立ち如何に扼腕したかゞ眼に見えるやうだ。されど、リエーヂユの要塞は、容易に陥落しな

かつたのである。——親しく陣頭に立て三軍を叱咤する獨帝の雄姿、如何に凜然として將卒の意氣爲めに振ふと雖も、リエーヂユの要塞は、容易に陥落しなかつたのである。獨り獨逸のみならず列國は等しく其の要塞の堅牢無比なるに驚嘆し、内部組織の如何なるかを知らんと努めたのであつた。當時、同地に在つて親しく觀戰してゐた外國一通信員はリエーヂユ要塞の内部と今後の戰略豫想を報じて曰く

獨軍のためにリエーヂユの要塞は包圍されしも、白耳義軍は尙頑強に要塞を固守しつゝあり、實際リエーヂユの要塞は實に無類の堅壘にして、建造は今より廿三年前なるも内部にベトン流し込込悉皆固め金に飽かせ、多くの時日を費やして造れるものにして外部よりは少しも要塞の様に見えず、堅壘の内部にはクーパームと稱する軍艦の砲塔の如き物設へありて上下左右に電力にて自由に動き得る様になしあり、並に砲六門を据ゑ附けあり、外濠にもクーパームありて是にも機關銃數多据附けあり、是が守備兵は野戰砲兵四個師團と騎兵二個

師團とにて戰時には十萬の國民軍之に加はり守備せるものにて、今回の戦ひも無論是等の諸兵が守り居る可し。

リエーヂユ要塞の堅固斯くの如くなれば之を攻略せんとするには奇襲の外は容易に成功す可くもあらず、然るに獨逸軍は之を見縊り全く野戰の如き攻め方を以て攻めしが如く頗る無法の戦法と云ふ可し、況んや兵數亦僅かに三個軍團(六個師團)の歩兵と二個師團の騎兵とを以てす、守備の兵數と比しても寧ろ劣れり、其劣り居る兵數を以て此堅壘に據る優勢の敵に然も晝間殊に野戰砲を以て攻め蒐れり、失敗固より當然の數なり、但し獨軍の主力は恐らくメツツ(獨領にして白國の南方に當る)邊にあるが如ければ、此中堅の進出迄茲處を牽制せん策なりしが如きも攻略斯く困難なれば攻少し、云々。

果して苦戰であつた。——カイゼル陛下は愈々焦立つた。リエーヂユ要塞攻撃に若も長い時日を要してゐたなれば、佛國の戰鬪準備は益々整うて、大會戰を試むる

のに非常な不利益であつた。——焦立つのも無理はない。元來獨逸は、軍を遣ると頗る巧みで、其の最初は疾風迅雷耳を掩ふに暇あらずといふ工合に兵を進めたけれども、白耳義に入つて一氣にリエーヂユの砲壘を抜くことが出来ないのは、獨逸に取つては一頓挫である。若し一舉にしてリエーヂユ要塞を突破したならば其の勢ひで白佛國境にある佛の一都會を攻略し直ちに巴里を突く事が出来るであらう。而し意外にもリエーヂユでは白軍が能く防いで居る。白耳義にはリエーヂユの外尙ほ二つの要塞あり、獨逸は尙ほ之を陥れねばならぬが、英佛は獨逸のなすが儘に任せて置かれないので今やリエーヂユ附近に遠征軍を進めて居る。獨逸は白佛英の三同盟軍に當らなければならぬ。愈々困難だ。即ち獨逸は早くも策戰の第一歩を誤まつたのであつた。

目的の爲めに必ずしも手段を選ばざるカイゼル陛下は、其の焦立ちの餘り、如何に多大の犠牲を拂ふとも、リエーヂユ要塞を陥落しなければ止まない——斯う云つ

た戦法の下に、更に大なる主力を傾けて其の攻撃に當つた。獨軍の陣營は、常に死屍累々であつた。戦友の死屍を楯としてリエーヂユ要塞を落よと攻むる獨兵の形勢は魔のやうに凄かつた。十四日、獨軍司令官フオン、コンミツヒ將軍は、遂に戦死したのであつた。其の苦戦の状も思ひやられる。斯うして氣短かな獨軍が、難攻不落の、リエーヂユ要塞の砲撃に専念して居る時、突如、カイゼル陛下の耳朶を掠めた一戦報！

曰く『精銳なる露國陸軍は、獨逸遠征の虚に乗じて其の首都巴里を攻略せんため頻りに軍隊を南下せしめつゝあり』と。

陛下の太い異様な口髭は、幾度びか打ち震ふた——而して、其佩劍の柄は、折れよとばかり、堅く堅く握り締められたのであつた。

巴里か！
伯林か！
風死して陣營寒し、

(二) 月明の夜の獨帝

難攻不落、宛然鐵塞の如き白耳義リエーヂユの大要塞も今や雲霞の如く突進せる獨逸軍の爲め重圍に陥り、勇敢にして精銳無比の白耳義軍の、幾多の生靈を賭して死守せるに拘らず、敵軍獨逸は手を換へ品を變へて攻め立て攻め立てたる結果、嗚呼、流石の要塞も今や命旦夕に迫りて、唯無念なる陥落の日を待つ許りの非運に葬られんとす、茲に於てか勇壯無比なる要塞内の白耳義兵八百は、既にリ市方面より撃退されたる本隊に合せん爲め、密かに獨軍の目を掠めて要塞を脱出し、本隊方面に向ひつゝあり、斯くて堅塞も漸く危からんとす——此んな外電は頻りに訪れた

けれども、依然、陥落の日は容易に來なかつた。

而も、獨軍は矢張り多大の貴重な犠牲を拂ふに過ぎなかつた。殊にカイゼル陛下の尖つた神經を、一入強烈に刺戟したものは、戦線にあつた其の皇太子フリードリヒ、ウヰルヘルム殿下の負傷し玉へることであつた。殿下は、獨逸第一騎兵師團附としてリエーヂユ要塞攻圍軍團に屬し、其の激戦中戦線に現はれて頻りと三軍を叱咤せる際、偶々白耳義軍の發射した彈丸の爲め負傷されたのであるが勇敢な殿下は尙も騎兵師團長プレヒト中將と轡を駢べて陣中を馳騁せられんとしたけれど直ちに應急手當を加へ、リエーヂユより約十哩を隔てたエイラシヤベルの病院に後送收容せられたのである。同地は獨逸要塞地たるアーヘンの附近であるから、早くも報に接したカイゼル陛下は、態々五十里を距る同地に急行し親しく殿下の負傷を見舞ひ給ふたのであるけれども、これがため獨軍の士氣は聊か喪失の傾きがあつた。カイゼル陛下は、愈々益々焦立たざるを得なかつた。

或る時は其の將士を膝下に集めて自ら戦術を授け、又た或る時は、月明の夜、夜營の天幕内に其の將卒を訪ひ、連日の奮闘を犒ひ且つ士氣の鼓舞に努めた。——蒼々たる月光を浴びて馬上に戦局を講ずる陛下の戯曲的意氣は、偶々悲壯な色彩を表現し、慄悍な獨軍の士氣を鼓舞するに充分であつたと見え、それから、間もなく、遂に名城リエーヂュを陥落し去つたのであつた。

善戦十餘日、遂にリエーヂュを陥落し去らるや白軍は、ブラツセル要塞に據つて獨軍を支へんとしたけれども、大河を決するに似た獨軍は、一舉之れを屠り、愈々白國の首都アントワープに迫撃した。

アントワープは、白國最後の牙營にして防禦線東西二十七キロメートル、南北三十八キロメートル白國第一の堅塞と稱せられてゐるのみならず、白軍が其のリエーヂュ要塞に據つて、獨軍の進撃を充分に阻止した爲め、英佛兩國は遺憾なく其の兵力を集中し獨逸に對し完全な對抗的態度に出づるを得た。當時、白軍のアントワ

プ籠城を目した列國は評して曰く

『白國軍はリエーヂュに據つて、獨逸軍の攻勢的前進を遅延せしめ、且つ其同盟軍をして滞りなく兵力を集中し得るに至らしめ、以て見事に其の責務を全うせり、而して白國軍の退却は數日前より豫期せし處にして、戦略上より起りたるものなり、而も白軍の北方に退却して現在の位置を占めたるは、獨軍の西方に前進するを側面より攻撃する大威嚇たらずんばあらず』云々。

等しく其の勇敢と沈着を推賞した。

白獨兩軍が、リエーヂュ要塞附近に於て一勝一敗を繰返して居た時、戦局は愈々擴大せられて、獨は佛、露の進入軍を腹背に受けたるのみならず英の佛を加勢するさへあつた。歐洲大亂の第一波たる塙塞の戦局は、恰も閑却せられたものゝやうに思はれたのである。

八月一日以來全く戰鬪準備の整つてゐた佛國は、白國軍がリエーヂュに獨國進入軍を支へてゐる間隙に乘じ、過ぐる普佛戰爭の砌り、獨逸に併呑された舊領地アルサス洲に向つて七日大軍を派出した。而して其の國境に獨軍を破つて左の戰報を齎したのである。

『佛國軍は獨佛國境を横斷してアルザス州に侵入し、激戰の後アルトキルヒを占領したる上退却しつゝある獨逸軍を追跡し、マルハウゼンに入れり。アルザスローレン人は佛國人を祖國のため歡喜して迎へたり』云々。

同じ日英國陸軍の第一部隊は佛蘭西に上陸したとの説が傳へられた。そして北海に於て獨軍のために破られ、其の海軍の復讐戰を試むべく、意氣昂然たるものがあるといふ。

斯して小競合ひ幾變轉、獨英佛は白國を其の中心地域として、麻の如く亂れに亂

れて行つた。當時我が某軍事通は此の大戦局を觀測して曰く

『白耳義軍を西進しつゝある獨軍主力の一部は、廿一日ナミユールとリエーヂュとの中間に於てミューゼ河を渡り、同河の北岸に移りたりといふが、由來ミューゼ河は佛國々境を越えんとする獨軍にとりては一大障礙なるを以て、獨軍は國境に隔れる前記の地點に於て其の主力の一部を渡河せしめ、以て佛國西北境より迂回し來りてミューゼ河の正面渡河を容易ならしめんとするに在るや明白なり、斯くて獨軍の最右翼は佛のリアル要塞附近を迂回して佛國々境に侵入し、其の主力本隊はマウベルブ、ジーベ、セダン、モントメジ、ロンギー等の要塞を目標としてミューゼ河の兩岸より佛領に突出し、佛軍の主力を粉碎せんと欲する目的なるは昨今愈々分明となれり。

之に對する佛軍の應戰策は或は其主力の一部を以てザールプアルツケンに侵入しメツ、ストラスブルグ兩要塞の間より急遽獨軍の左側背を衝かんとするも

の、如き状ありたるも、同方面の戦況は、最近佛軍の勢力餘り有力ならざるが如くなれば、佛軍の目的乃至其の主力の所在判明せず、想ふに佛軍は依然其主力をヴェルダン方面に置き、白耳義を通過して刻々侵迫し來る獨の大軍を各地要塞附近に引付けて、所謂攻勢防禦に出で、敵軍の手薄なる場所を發見次第機を見て突進し、獨軍を悩まさんとするに非ざる乎、何れにしても西方に於て獨軍と對抗しつゝある聯合軍は、絶對的の攻勢を執ることなく大体に於て守勢を執り、東方に於ける露國軍の攻勢進捗を待望しつゝあるが如し、但だ佛軍が愈愈白耳義を捨て、自國々境に退き爲めに獨逸騎兵潜入し來りて英軍の上陸地点を攻掠し、兵站線を斷たるゝが如きことあらんか、聯合軍にとりては遠距離の南方に兵站線を移さざる可からざることとなり、尠からざる打撃を與ふるなるべし云々。

北方に於ける露國は、屢々其の軍隊を驅つて獨の國境を脅やかした。——勇敢な

露軍と、慄悍な獨軍の決戦は、其の兵力と其の戦術の優劣を窺ふ上に、列國の等しく多大の興味ある「謎」としたのであつた。一方、塙塞は尙ほ頻りに砲火を交へてゐる。伊國も將に期する處があるやうだ。最も油斷のならぬ米國は、何事か騷擾の裏面に潜んで劃するものゝやうである。和蘭も中立を宣言したけれど、其の地勢上何時其の領域内に砲火を見ぬとも限らぬ。瑞西の中立は、横暴なる獨逸國境守備兵のために侵犯せられてしまつた。

小さなモンテテグロが決然として起つた。

そして、小さな其の矛を塙國に向つて閃めかすに至つた。

近海は常に殷々たる砲聲！

西歐の野は、擧げて戦雲漠々！劍尖縦横。

天日爲めに暗うして其の戦局の推移と、交戦國各自の運命とを轉た窺知するに苦しましめる。

述せる其領土權又は特殊利益を防護せんが爲め交戦するに至りたるときは、何れの地に於て發生するを問はず、他の一方の締盟國は直に來りて其同盟國に援助を與へ協同戰鬪に當り云々。

と規定せられ居るを以て戰局が東洋まで波及するに於ては日英同盟の活動は免れざる處なるべきに依り、列強の日本の態度を懸念するは當然の事にして、特に露の如き東洋に至大の關係を有する國に於て其必要を感ずるならん、故に我日本は今回の壘塞問題は輕々に看過すべからざると共に朝野自重し苟も大局を誤るが如き事なきを期せざるべからず云々。

斯んな説を、歐洲擾亂の未だ序幕にも還入らぬ八月一日前後に於て、早くも堂々發表してゐる我が一外交通があつた程であるから、戰局の推移に伴ひ、早晚帝國も矛を執つて起つやも知れないと心ある人々の竊かに斯して居たところであつた、而し、又た一方政府筋の某有力者はそれから間もなく、帝國を禍亂に捲込まれないも

のとしての觀察の下に、斯う云つてゐる。

歐洲大陸の禍機は終に爆發せり、米國を除きたる歐洲列強は交戦國と中立國とを問はず視聽を歐洲以外に轉ずるの違なからんとす、然れども幸ひ日本は此の大禍亂の局外にあるを以て平和的施設に進むを得べく、大正新時代の初期に於て、日本が斯く平和的國力發展の機會を得たるは君國の爲めに無上の慶福と言ふべし、而して此の平和的事業に於て聖明に猷替し、帝徳を盛んならしむるは正に現内閣の責任なり、惟ふに平和的經綸に富む大隈首相加藤外相は、其の責任の在る所を自覺し翼賛の効を誤らざるべし、日本は將來禍亂の外に在るに相違なしと雖も全然沒交渉ならざるは開戦初期の事情に於て明かなり、實に大陸の強國も極東の日本を無視して最後の決心をなす能はざりしなり、果して然らば戰局進行の時期に於ても戰局終結の時期に於ても日本が重要な位置に在るは自明の理なり、日本の平和的施設に努むべきは正に此の間に存す、況や戰亂

一たび終結せば其時は歐洲整頓の時期と見ざる可からざるを以て、歐洲列強は戦前以上亞細亞政策に執心なるべきは必然なれば、日本は豫め其の時期に要意せざる可らず、單り大隈首相と言はず又單り加藤外相と言はず、此の重要な時期に輔弼の責任に立つ内閣諸公は、平和の施設に献替して大正の御代を輝かざる可らず、是れ恐らくは全國民の現内閣に對する期待なるべし云々。

主戦と非戦、斯うした御互ひの意見が隨所に試みられてゐる時、究如、英國では獨逸に宣戦布告の態度に出でしまつた。

我が帝國上下民衆は、覺えず意込んだ。

四日午前九時を以て帝國政府は臨時閣議を永田町首相官邸に召集した。そして時局に關する重要政務に就て議を練つた。是れ今回の時局に伴ふ最初の臨時閣議であつたのである。議事の内容は無論窺知するを得ない。而し當時其消息通は、閣議に於て纏められし對歐方針を評して曰く

政府が戦局の東洋に波及せざらんことを希望し、然かも一朝英國の東洋に於ける利益に危殆を感ずるに至れば、同盟國として止むを得ず盟約の義務に任ずべしと傳へらるゝは最も穩健なる態度にして、今日の場合日本の態度としては極めて機宜を得たる方針なり、今後戦局の進展に伴ひ又適應の態度を取るの必要に遭遇するやも知れざるが、一般國民就中經濟的方面に於ては政府の穩健なる態度を會得して大に通商上の利益を收めざる可らず、但し、機宜を得たる方針といふは要するに當面の策として見たるが爲めのみ、更に注意を要すべきは戦局の進展にして殊に戦局の收拾期はヨリ以上注目するを要すべし、若し露佛の勝利を以て戦局を收拾せば佛國がアルサス、ローレンスを恢復せんとするは明かなるも、此の場合露國は何ものを要求せんとするか、地中海にも北海にも衝突點多き事情は、或ひは東洋の一點（即ち膠洲灣）に囑望するに至るやも知る可らず、故に戦局は幸に東洋へ波及せずとするも戦局の收拾は日本に重

大の關係を及ぼすを以て、帝國の對外策又必ずしも樂觀を許さず云々。

五日午前五時三十分、上野驛發列車に乗り込んだ高級武官、それは、陸相岡市之助氏と加納副官であつた。——綠翠深うして風清き日光田母澤の御用邸に、折柄御避暑あらせらるゝ、聖上陛下の御前に伺候し、天機奉伺の後、陸軍々政上重要事項並に歐洲擾亂に關し英佛獨塊露各國駐在武官其他より達した電報報告につき委曲奏上と、御下問に奉答する爲の旅行に過ぎなかつたけれど、昨日開かれた臨時閣議を通じて、急迫せる時局を想像しつゝ、靜かに陸相の面貌を窺はゞ、其處に何等かの重大な『謎』が含まれてゐるものゝやうであつた。

その翌日であつた。——
●岡陸相は六日朝來其官邸にありしが、同日午前七時半頃先づ大島陸軍次官の

●來訪あり、次で長谷川參謀總長も亦馬車を驅て來り、陸相次官總長は樓下一室に於て鼎座何事か數刻に亘りて凝議する所あり、當日は右の外奈良陸軍省高級副官、廣瀨主計課長、加納秘書官、參謀本部庶務課長等何れも參邸し居り、其の光景何となく物々しく時節柄多大の注目を惹きしが、やがて九時前後に至り何れも退邸せるを見受けたり。

●此んな消息が滿都の人々の耳朵に聳く響いた。恰も同じ日、東郷元帥は午前八時三十分といふに海軍省に出頭、既に登省執務中の八代海相と大臣室で會談すること約二時間餘に及んだ。

●海陸巨星の密議！而も同じ日の同じ刻限！上下民衆の胸は、期せずして早鐘のやうに高鳴らざるを得なかつた。

●廟堂を圍繞する風雲の如何んをのみ觀測するに急にして、我が國民の視聽の等しく歐洲戰況外に走つた時、外電は突如として

豫て所在不明なる獨逸東洋艦隊旗艦シャルンホルスト號及僚艦グナウゼナウ號(共に排水一萬千四百廿噸速力廿七節千九百零六年進水式新裝甲巡洋艦)の二隻は、頃日來南方某地より日本海方面に北航の途に就き居れる形勢あり、同時に英國東洋艦隊の旗艦ミノター號、ハムプシャー號の二隻も之に接觸を保つべく既に某方面に活動を開始す、埃國の東洋唯一の派遣艦カイゼリンエリサベス號(巡洋艦)は頃日來獨逸艦隊の根據地膠洲灣に獨艦と共に碇泊しつゝあるもの如し云々。

といふ意味の消息を齎した。恰も、廟堂圍繞の風雲の流動を促進せしむるかのやうに、——
眞に、多事だ。

(二) 意義ある還御の日

八日には加藤外相が日光へ参邸した。無論歐洲戰亂に伴ふ我が帝國の重大政務に關する奏上であつた。そして、其の日の海軍省では、朝から八代海相を圍繞する東郷、井上兩元帥、出羽、片岡、伊集院三大將の海軍巨星が、重々しい口調で何事か密談を凝してゐた。——其の夜、永田町の首相官邸に第一回元老大臣會議が開かれた。元老の出勤は常に國家の重大事を暗示する。國民の神經は愈々鋭敏を加へた。數回の臨時閣議と、數回の元老會議とを経て、略ぼ帝國の時局に對して執るべき諸般の準備が整つた。そうして、十日前後には、モウ次ぎの如き説をすら傳ふるものが隨所に在るまでに局面は進展したのである。

東洋の局面に一大波瀾を捲起せんとする情勢切迫し、我帝國は之が平和確保のため積極的行動に出づべきにより、舉國一致の必要云ふ迄もなければ、現内閣は多分臨時議會を召集して須要の經費を要求するならん、蓋し其召集發令の時期は、帝國が愈々軍事的行動を開始したる時にあるべく期待されつゝあり、

若し然らんには臨時議會に要求せらるべき經費の外に、緊急止むを得ざる若干の經費は別に憲法第七十條の規定に基き豫備金より支出し、事後承諾を受くることなかるべし云々。

●大隈首相は、愈々 聖上還御を日光御用邸に奏請した。

陛下は、還御の日を十五日と仰せ出だされた。——重要政務の御決裁とは云へ、綠陰の影麗しき日光を捨てさせられ、眞夏の都へ還らせ玉ふ御心根を、恐懼せざるものとはなかつた。

十五日——空、碧く澄み渡つた絶好の還御日和。天も、意義深き今日の還御を心から迎へ奉るかのやうに思ひなされ、上野驛頭より遠く二重橋畔に至る御順路には左といはず右といはず、奉迎の赤子が襟を正して肅然と堵列してゐた。停車場には禮装に威儀を正せる大隈首相を初め各大臣并に大山内府、長谷川參謀總長、奥井上兩元帥其他文武の顯官蠅集し、恰も我が日本帝國の精粹を此の狭い一室に縮撮した

かの感あり、而かも緊張せる空氣の裡に一脈の活氣と、犯し難い尊嚴の磅礫たるを覺えた。

斯くて、午前十一時十分、御先着あらせられし伏見宮同妃殿下には東伏見宮同妃殿下、梨本宮同妃殿下、北白川宮、東久邇宮殿下と共に歩 廊に參進あらせ給へば百官肅として口を噤み御待ち申し上ぐるも少時、正十一時二十分、六七〇五の機關車を先頭に鳳駕は静々と迂るが如く來着し、畏くも白絹の装ひ凝らした御車内に兩陛下の立たせ給へるを拜した。と思ふ時しも金菊燦然たる天皇旗は、爛々たる陽光に照り映えて、光耀の御色燃ゆるが如く旗手の手に捧げられ車寄にと進む。陛下には伏見大將宮を始め各宮同妃殿下の御挨拶を受けさせ給ひつ御降車あらせられ、そうして畏くも奉迎せる百官に御會釋さへ給はつた。此日の 陛下は大元帥の制服凛々しく召させ給ひ、龍顏殊の外御晴やかに拜せられ、鷹司侍從長の捧持せる深綠色せる錦の御袋に納め申せし國璽并に猩々緋の錦欄に納め奉る御劔御璽を捧持する

侍從并に波多野宮相等を扈從し給ふ英姿の桓々たるは、過る年、征露の大勝を伊勢の大廟に奉告あらせ給はんと新橋驛を出御あらせ給ひし明治大帝の英姿に御似させ給ふものから、尊嚴の氣一入漂ひ、沿道の奉迎民の恐懼極まる中を、鹵簿肅々として玉の宮居に向はせ給ふたのであつた。

待たれた御前會議は、還御の日直ちに、九重の雲深き皇城の一室「牡丹の間」にて開かれた。

午後四時五十分から、午後五時五十分まで——一時間に亘つた其の會議は、我が帝國の重大事を決せる最も記念すべき貴重なタイムであつた。

風か。雨か。

今日の御前會議の、如何に莊重な、そして、嚴肅な空氣に満ち充ちてゐたもので

あつたか？漏聞する處に依れば、大隈首相以下各大臣と山縣、大山、松方の三元老其他の人々が悉く牡丹の間に參集して雲時、折しも警蹕の聲凜として聞え大元帥の御軍服を召させられし 陛下には内山武官長唯一人を隨へ給ひ静々と牡丹の間に出御、其の颯爽たる英姿！元老、大臣等は何れも襟を正した。廣からぬ牡丹の間の天井には大形の電氣扇(旋風器)渦卷の如く廻轉し、卓上には唯一個の裝飾氷置かれあるのみ。陛下には卓を前にして正面の玉座の椅子に倚らせ給ひ、右手には煙紫に柵曳くシガーを煙らせ給へども、將に大隈首相より奏上する閣議の經過を聴取あらせられんとする時輕き御會釋ありしのみ微動だも爲し給はず。首相の奏聞了るや、元老より一二の發言ありたる外、元老各大臣、亦不動の姿勢、其處に暫し續く静寂の光景は最も莊嚴を極めたといふ。斯くて徐ろに 陛下の御前に於て決せられた事項は何々であつたらう。御前會議の終るや先づ加藤外相、島村提督と前後して退出次いで七時近く元老大臣相踵いて退り去つた。

再び偉大な静寂に返つた大内山の夏の宵は、大アーク燈の煌々と輝やけるのみ。時に急ぐ晚鴉の羽叩きの忍やかなのも、今宵の緊張し切つた氣分を意義あらしめる一つの背景であつた。それに引きかへ、其の夜の外務省は、太くざわめいてゐた。

大事發表！

此んな文字が、帝都の人々の口々に唱へられてゐる時、遞相武富時敏氏は昵近者に語つて曰く

歐洲動亂に對する獨逸の態度は随分亂暴を極め、其餘波延ひて東洋に波及しつゝあり、帝國政府に於ては之か爲め曩に屢々閣議を開き、帝國の執るべき態度に就き慎重協議しつゝありたるが其後獨逸の極東に對する行動は、到底此儘に放任し置き難きものあるを認め、曩日來英國政府に交渉を重ねつゝありたるが、愈々其回答に接したるを以て十四日午後元老大臣會議を開きて帝國の國威國光を内外に宣揚し東洋の平和を永遠に確保し併せて日英同盟の本旨に副ふべ

く斷乎たる帝國の執るべき態度を決定せり、右に就き聖斷を仰がん爲め、十五日畏くも、天皇陛下の還幸を奏請し急遽御前會議を開きたることは人の知る處なるが、其結果豫定の態度を執るべき御聽許を得たり。

帝國の執るべき態度に關する聲明は、十五日夜八時を以て列國に通牒を爲したるが同時に獨逸國に對し『帝國は日英同盟條約の條章に基き、適當の行動を開始するを以て某日間に回答すべし、期限内に會答せざれば愈々斷乎として自由行動を執るべし』との最後の通牒を發し、十六日午後四時外務省に於て之を公表する筈なり。されど歐洲は動亂中なれば勢ひ電報の遲延を免がれざるのみならず、動亂の中心地たる獨逸の如きは、場合に依りては或は不着たるやも計られざるも、萬一指定期日内に回答に接せざれば帝國政府は斷乎として自由行動を執るべし。而して大詔煥發の時期は、即ち帝國が愈々自由行動を開始すべき秋に於て其の必要を見るべきも、右に對しては無論閣議を開き、或は元老

大臣會議を経、又は御前會議をも奏請して 陛下の聖斷を仰ぎたる後なるは勿論なり云々。

果して十六日午後、帝國政府は十五日夜獨逸政府に左記二個の最後通牒を發したことを公表した。

一、東洋に於ける獨逸艦隊は退去すること然らざれば 武裝を解除すること

二、膠洲灣を支那に還附する爲め、九月十五日迄に日本に引渡すこと

煽り立てるやうな新聞號外の鈴の音が、斯うした帝國の態度を津々浦々にまで傳へて行つた時、老ひも若きも等しく腕を撫てた。そして、『愈々戦争だ』

と叫んだのであつた。

其五 遺恨二十年！

(一) 待たる、午砲一發

我が帝國の對獨最後通牒回答は、八月二十三日正午限りであつた。

あゝ待たる、其の午砲一發！

通牒を發して回答の來るまで、其の一週間内外の小日數は、帝國上下民衆は勿論、他列國の人々をして最も興味ある批評と想像を逞しうせしめし期間であつた。在野の某消息通は當時評語を試みて曰く

我國の獨逸に對する最後通牒は、獨逸に送附せらるゝと同時に米、露、佛、支等の列國に知照し我國が之を獨逸に送附せしは東洋の平和を永遠に確保し、

日獨兩國の間、そこに早くも戦氣の浮動を窺ふに足る。

待たるゝ二十三日は来た。遂ひに来た。

十時。

十一時。

正午！

而し、回答は来なかつた。午砲は、初秋の氣をたゞえた紺碧の空高く鳴り響いても、獨逸政府の回答は果して来なかつたのである。

國交斷絶だ。

豫期せられたる無回答。而し、我が帝國政府と帝國の民とは今更ら獨逸の暴慢を憎惡した。無暴を憐愍した。無回答といふ誠意のない形式の下に、極東平和の爲め

最善の手段を盡せる我が帝國政府を侮辱、蔑視せし其の態度を痛憤した。斯くて窮極するところは、

『敵愾心の發露』

以外遂ひに何物もなかつたのである。

『卿等は、朕と朕の國のために、最後の一人となるまで青島を死守し、而して敵對國と善戦すべし』

此んな勅諭をカイゼル陛下より下賜せられた青島籠城軍總督ワルデック將軍が、日獨國交斷絶の日、其の部下を集めて親しく之れを読み聽かせ、且つ士氣の鼓舞に努めたと傳へ聞きし我が帝國上下民衆は、愈々扼腕せざるを得なかつた。

我が帝國外務省は、其の日の午後二時を以て獨逸大使レックス伯に旅行券を交附した。伯は八月二十七日ミチソタ號で本國へ引揚ぐるといふ。

膠洲灣在留邦人男子六十四名、婦人五十五名、小兒二十五名合計百四十三名

は、何れも元氣にて家財を携へ大連瀛船會社瀛船利濟丸に乗込み、八月二十一日午後六時青島を出帆し芝罘に向へり云々。

斯う云つた電報の到達したことを、二十二日我が帝國政府は發表した。そして、我が帝國各地に在住する獨逸人も、全部夫れく引揚ぐることとなつた。斯くて、日獨兩國は全く交戰状態に入つたのである。

(二) 宣戰の大詔燦發

日東帝國の空を去來する一抹の風雲！

凝つて雨を呼ぶか。嵐を招くか。

長谷川參謀總長は馬車を驅つて參謀本部に出頭し、明石次長、山梨、尾野等各部長中川大佐等各課長を總長官房に召集し、帷幕の秘密會議を開いた。此間山梨總務部長は數回膠洲灣方面の地圖を繙き、一方書類を取寄する等頗る忙し氣に見受けられ

た。——岡陸軍大臣は陸軍省大臣官房へ大島次官、柴軍務、河合人事、筑紫兵器、森醫務、隈經理、清水法務各局長を大臣官房に召集し緊急軍務會議を開いた。——八代海軍大臣は鈴木次官、秋山軍務局長以下各局長、谷口副官其他各課長一同を大臣官房に召集、最後通牒の海軍々務に關し、他人の入るを嚴禁して長時間の秘密會議を開いた。——斯うした消息の頻りに喧傳せられ、上下民衆の意氣は、未だ戰はずして既に敵對國の凡てを呑むの概があつた。

此の時に當り、我が帝國上下民衆は、必ずや二十年前を想起せざるを得ぬことであらう。——征清の役、我が民族の尊き多くの血潮に替へて瀛ち得た遼東半島が、傲慢無禮な三國干涉の爲めに、熱涙を吞んで還附するに至つた顛末を想起せざるを得ぬであらう。其の三國干涉の陣頭に立つたは抑も誰か。

獨逸ではないか。カイゼル陛下ではないか。而も、彼れは遼島半島と對峙する山東半島の膠洲灣を租借し、要塞を構へて武備汲々、動もすれば東洋の平和を攪亂しつゝあるのではないか。

暴慢不遜の獨逸政府。

遺恨二十年！

報復の好機、而して膺懲の絶好機會である。

當時、三國干涉の談判の衝に當つた一行中の村田陸軍中將は、當年の宿怨を回顧して、次ぎのやうな非痛な實話を其の昵近者に洩した。

『馬關條約後突として三國の干涉が起つた爲め、上下擧つて洵々騒然たる際廣島の大本營に於る御前會議の結果、假令遼東半島を還附するにしても一度受取つた後になす可きが至當であるとの見解の下に、伊東已代治子を辯理大使に陸軍側から我輩、海軍側から野間口中將、山縣少將(當時何れも大尉)及び故檜原

陳政、佐藤顯理、龍居頼三、西源四郎等の諸氏を隨員として、批准條約交換地たるチーフーに赴く事となつた。明治二十八年五月三日宇品を發して、同六日旅順の大總督府に着し、總督小松宮彰仁親王殿下に拜謁、川上、樺山兩大將とも會見の上、軍艦に搭乘して行つたら如何かといふ説もあつたが、戰鬥力の無い御用船に乗つて行く方が却つて好からうといふ事に一決し、遂に一隻の護衛艦をも附せしめずして同夜横濱丸にて旅順を出帆した。

翌七日拂曉一行は無事チーフー港に入つた處朝靄の晴れると共に港内には既に三國の艦艦約十隻、悉く戰鬥準備を施し、總ての砲門を開いて威風堂々我れの來たるを待受くるを見た。此威嚇的態度を見たる一行は切齒扼腕悲憤慷慨至らざるなく、怒髪天を衝くの概があつた。聽て清國側からの要求で上陸する事となり、一行は薙刀及び鎗を携へて堵列して居る支那兵の中を輿に乗じて、我憲兵二十名程の護衛の下にビーチホテルに赴いた。其途中に於ても獨逸の水

兵などから盛んに讒謗の聲を浴びせられたが、幸ひに何等の樁事も醸さなかつた。斯くして清國の使節伍廷芳、聯芳等と會見し、直ちに條約の調印を求めた處、何分背後に三國の黒幕があるので言を左右に託して之れに應じない。加ふるに我大本營に向け調印の延期を求めてあるから、數日間猶豫するが當然であらうといふ。

併し我々は左様な通知を受取つて居らぬと言つて盛んに折衝を重ねたが、其夜十時に至るも何等の解決を見出さない。夫れて我輩は當時支那の顧問であつた米人で、前大臣の顯職に立つたホースター氏に面會し、我が大使は清國が調印に躊躇するを憤り、即時歸國す可しとて今將に準備中である。斯くては馬關條約の精神を没却し、再び兩國の開戦を見る事は必然であるから一考を煩はし度いと申し出てたのでホ氏も大に驚き、早速北京にある李鴻章に電照し、又伍や聯をも説く處があつたものと見えて、談判が進捗し、遂に同夜十一時過ぎ

に至つて漸く批准を交換し、急遽旅順に引き上げ、大總督府に於て祝盃を擧げた様な次第である。但し、三國干渉と言つても其中の佛國は、勢ひ已むなく附合に加盟したので、寧ろ我に好意を寄せてゐたけれど、獨逸は實に其の盟主なのだ。而して其の威嚇的態度も甚だ峻烈であつたのだ云々。

國交斷然と共に、宣戰の大詔の煥發を見るだろうと一般に觀測して居た折柄、果せる哉、二十三日午後六時といふに、我が帝國皇帝陛下は實に次ぎのやうな宣戰の大詔を煥發し給ひ、國民の意氣を激勵あらせられたのである。

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ忠實勇

武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ獨逸國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜ク力ヲ極メテ
戰鬪ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜ク職務ニ率循シテ軍國
ノ目的ヲ達スルニ勗ムヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ
手段ヲ盡シ必ス遺算ナカラシムコトヲ期セヨ

朕ハ深ク現時歐洲戰乱ノ殃禍ヲ憂ヒ專ラ局外中立ヲ恪守シ以
テ東洋ノ平和ヲ保持スルヲ念トセリ此ノ時ニ方リ獨逸國ノ行
動ハ遂ニ朕ノ同盟國タル大不列顛國ヲシテ戰端ヲ開クノ已
ナキニ至ラシメ其租借地タル膠洲灣ニ於テモ亦日夜戰備ヲ修
メ其ノ艦艇ヲ東亞ノ海洋ニ出沒シテ帝國及與國ノ通商貿易

爲ニ威壓ヲ受ケ極東ノ平和ハ正ニ危殆ニ瀕セリ是ニ於テ朕ノ
政府ト大不列顛國皇帝陛下ノ政府トハ相互隔意ナキ協議ヲ遂
テ兩國政府ハ同盟協約ノ豫期セル全般ノ利益ヲ防護スルガ爲
必要ナル措置ヲ執ルニ一致シタリ

朕ハ此ノ目的ヲ達セントスルニ當リ尙務メテ平和ノ手段ヲ悉
サムルコトヲ欲シ先ツ朕ノ政府ヲシテ誠意ヲ以テ獨逸帝國政
府ニ勸告スル所アラシメタリ然レトモ所定ノ期日ニ及フモ
朕ノ政府ハ終ニ其ノ應諾ノ回牒ヲ得ルニ至ラス
朕皇祚ヲ踐テ未タ幾クナラス且今尙皇妣ノ喪ニ居レリ恒ニ平
和ニ眷々タルヲ以テシテ而カモ竟ニ戰ヲ宜スルノ已ムヲ得サ

ルニ至ル 朕深ク之ヲ憾トス
朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ニ倚頼シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ
帝國ノ光榮ヲ宣揚センコトヲ期ス

大正三年八月廿三日

御 名 御 璽

各 大 臣 副 署

大詔の換發後、間もなく左の詔書が、官報號外を以て公布せられた。

詔 書

朕帝國憲法第七條及第四十三條ニ依リ本年九月三日ヲ以テ帝國議會ヲ東京ニ召集シ三日ヲ以テ會期ト爲スヘキ事ヲ命ス

御 名 御 璽

大正三年八月二十三日

各 國 務 大 臣 副 署

夕暮れの巷を、せき立てるか何んどのやうに響いて來る號外の音に、それと知つた帝國民衆は、モツ家業の手につかぬまで昂奮した。強露を討つたそれ以來、久しく渴してゐる『軍國の意氣』を茲に味はふを得て、其の精悍な民族的性情は、凡てのものを壓して、躍動せずにはゐられなかつた。

外務省は在獨船越代理大使に向け召還の急電を發した。

之れと同時に同省は、日本駐在の列國大公使に對し、文書を以て日獨兩國の交戰状態に入つた旨を通告し、そして一方駐外帝國大公使へも夫れ々急電を發して同様の通牒をなし、列國政府へ通告せしめた。

軍國の諸準備は、斯くて漸く整はんとする。
遺恨二十年、劔擲を執つて蹶然と起つ。
それは、真に壯烈な、そして威容の凜たるものであらねばならぬ。

(三) 進むは何處ぞ

九州邊の第十八師團へ動員令が下つた。
關東の千葉特科聯隊へ動員令が出た。

——噂は噂を生んで、帝國の風雲、刻一刻と急迫を告ぐるに至れば、床場の鏡の前、湯屋の洗場、人の口に花の咲くのは血腥い之れ等の話題のみであつた。
突如、『出征艦隊要部任命』として次ぎの辭令が發表せられた。

補第一艦隊司令長官

海軍中將

加藤友三郎

海軍少將 士山哲三
同 藤本秀四郎

補第一艦隊司令官

海軍中將

山屋他人

補第二艦隊司令長官

海軍中將

加藤定吉

海軍中將 枋内曾次郎
海軍少將 上村翁輔
同 岡田啓介

補第二艦隊司令官

進むは何處ぞ。

正義の爲めに揮ふべき斬魔の利劍は斯くて鞘を脱した。——皇軍の嚮ふ處魚龍も
 潜み草木も依らず。水陸兩軍の、並び進み行く前には、未だ曾て何者の敵も面を向
 け得ないといふことを、日東六千萬の帝國民は、日東帝國の爲めに、誇負せざるを
 得なかつた。

西歐今や亂魔の如く、何れも干戈を執つて武装に汲々、我が帝國の皇軍幾万、海
 に陸に平和の賊を鎮定すべく活動を開始しつゝある九月四日、軍事費五千三百萬圓
 を附議すべき第三十四帝國議會の開院式は、極めて嚴肅に舉行せられた。此の日、
 我が敵聖文武にまします

●聖上陛下は豫て仰出された如く午前十時卅分内山侍從武官長陪乘波多野宮内大臣
 ●戸田式部長官、●鷹司侍從長、●伊藤式部次長、●河村宮内次官以下の諸員を従へさせ給

ひて宮城を御出門、順路を貴族院に行幸あらせられた。初秋の空隈なく晴て日の光
 あか／＼と八紘に輝き、微吹く風は街路の柳の病葉を搖がしてゐるけれど、殘んの
 暑さ尙ほ堪へ難き中を、拜觀の庶民は薺々と路傍に堵列し、軍國初頭の盛儀を仰ぎ
 奉る。貴族院正門内には、奥衆議院議長、兩院副議長書記官等整列して奉迎參ら
 せ、徳川貴族院議長は聖駕を御車寄に迎へて直ちに階上の便殿に先導し參らせ、陛
 下には御少憩中徳川、奥兩院議長大隈首相以下各大臣芳川副議長以下各樞密顧問官
 に拜謁仰せ付けられた。斯くて十時五十五分兩院議員は式場に整列した。續いて玉
 座の右方に大隈首相、大浦農相、加藤外相以下各大臣と芳川樞府副議長以下各顧問
 官が孰れも盛装美々しく着席し、陛下の入御を待ち奉れば、程もなく式部長官の
 先導で大元帥の御正装に英、露、佛三國の最高勳章を御佩用遊ばされた。聖上陛下
 には、威容凜然入御遊ばし、諸員最敬禮の裡に玉座に着かせられた。扈從し給へる
 ●貞愛親王、●依仁親王の兩殿下も、玉座の左方に着かせられた。

此刹那、院内には嚴肅の氣漲り渡つて數多き兩院議員は、恰度石像のやうに息を吞んで控へた。總て大隈總理大臣は勅語書を捧げ、大浦農相代つて之れを、陛下の御前に奉進すれば、陛下には玉音朗かに

朕茲ニ帝國議會開院ノ式ヲ行ヒ貴族院及衆議院ノ各員ニ告ク

歐洲戰亂ノ殃禍今ヤ東洋ニ波及シ朕ハ東洋永遠ノ平和ヲ保持セムカ爲終ニ

獨逸國ニ對シ戰ヲ宣スルノ已ムヲ得サルニ至レリ

朕ハ帝國臣民カ義勇克ク公ニ奉シ一致和協速ニ交戦ノ目的ヲ達シ以テ國光

ヲ宣揚セムコトヲ期ス

朕ハ國務大臣ニ命シテ時局ニ關シ特ニ緊急ナル豫算案及法律案ヲ提出セシ

ム卿等克ク朕カ意ヲ體シ和衷協賛ノ任ヲ竭サムコトヲ望ム

と、國光宣揚の勅語を給ふ。兩院議員及び陪觀の各外國使臣等は、一句も洩さじと

陛下の玉音に耳を澄してゐた。斯くて各員最敬禮の中に讀み終らせ玉へば、徳川貴

族院議長御前に進み、勅語を拜受して引下つた。

— 軍國議會初頭の盛儀は、斯うして嚴肅と莊重の裡に終りを告げたのであるが

兩院はそれから直ちに本會議を開き奉答文を議決した。

會期三日の軍國議會は、六日の官報を以て更に三日を延長し九日まで開會すること

になつた。— 所謂舉國一致、只だ誠意以て軍國の事に當らんとする政府の施設を

信賴し、而して之れに一任と決定、反對黨も中立黨も政府の興黨と共に全院一致と

いふ『軍國議會の麗しさ』を發揮して、十日閉院の式を舉行したのであつた。

時、恰も、ロンドン電報は、マルヌ河を挿んで獨軍と激戦中であつた英、佛聯合

軍が、大勝利を博したとの吉報を傳へた。

今や將に、震天動地の軍事的行動に出でんとする我が軍國の意氣！爲めに昂騰

すること數等。

其六 軍國の富士

(一) 此の日、天高し

——それは、天高く、氣朗かな日であつた。

大正三年九月二十六日、こゝ岳南の一都會、初秋の空高く晴れて氣澄み渡り、淺間山の樫の梢にけたいましく鳴く百舌の聲々に、六萬市民の身心の、何んとなく一種の緊張を覺えてゐる日であつた。

城壕の畔にそゝり立つ岳南旅團司令部を圍繞する空氣の、平素の静けさを破つたそこに行き交ふ將卒の風貌、常よりも更に凜たるを見受けた人々は、思はず『扱てこそ』

と、拳を握つたのである。

果然、動員令一下。時に、午後零時三十分。

實に、岳南の一聯隊と、程近い湖東の一聯隊とへ、此の日、此の時を以て、動員令正に一下したのであつた。

管下の各地は——都會も、鄙も、海邊も、山麓も、何物の抵抗力をも壓して邁進せねば止まぬと云つたやうな『動員令』の三字の爲めに、『刹那の動搖』を味はぬ者としてはなかつた。『刹那の動搖』の後に、次いで來たる心的動作は『反撥の意志』であつた。而も、『強固なる意志』の發動であつた。

『戦争だ』

『痛快だ』

『特に選抜された我が岳南の健兒の名譽のために、我々岳南の健兒は飽くまで君國に盡さねばならぬ』

此の意氣——壯烈なる此意氣は、期せずして十年前に於ける征露役の時、首山堡に於て惡戰苦闘、遂ひに敵を屠り盡せし當年の勇敢なる岳南健兒の骨肉を、其のまゝに傳へたものであることを語つてゐるではないか。

出征軍に對する補充軍並に豫備兵の應召は、二十八日からであつた。役場を経てそれ／＼『召集令』を手にした津々浦々の健兒には、妻を娶つて間のない男もあつた。可愛盛りの子供に『父』と呼べる、男も、老ひたる母に『杖とも柱』とも力にされてゐる男も、一家五人の家計を自分一人で立て、行かぬばならぬ責任の重い男もあつたのである。斯うした様々の境遇の人達ちが、同じ形の『召集令』を手にした時、君國のためとは云へ、今更らに『出陣の跡』の家族の様に想倒して、一種の感慨の湧くのを禁じ得なかつた。

されど、仰がずや眉上に迫る雲表の富嶽を！

何等かの高教を吾人に囁くが如き其の偉なる姿を！

高士の氣魄に似たる山嶺の白雪を！

『軍國の富士』の氣高き。斯くて其の心靈の上に大なる暗示を得た岳南の人々は、君國の爲め、民族の爲め、資はる者の凡てを振り拂ふて、『死せずば歸らじ』の大頓悟を獲得した。

富士の存在は、實に『教訓』其の物であつた。

そして、岳南の人々に取つての『師父』であつた。

斯くて、九月二十九日までに、召集せられた若干の健兒は、此處に若々しい氣分に返つて、規律正しい軍務に服することゝなつたと共に、所狭い營内へ全部入り切

れず、其の幾部分は、市内各町の民家並びに寺院へ分宿した。

昨日まで静やかだつた此の都會に、武装を整へた多數の軍卒が、佩劍憂々、忙がしげに深更まで亂るゝさま、よしや、歩哨は佇立せずとも、よしや、喇叭は鳴り響かずとも、軒から軒、町々の隅々まで、軍國的色彩滿ち充ちて、誰れも彼れも所謂『戰爭的緊張せる氣分』に觸れぬものとはなかつたのである。

こゝ安東村練兵場の朝——露に濡れた草の中の所々に、十數個の幕營が急造され骨も身も占めつけるやうな初秋のソヨ風は、其の天幕の端を輕やかに吹いて行く。そこに高く嘶く駿馬の聲！應召された健兒の群は、未だ軍服と着替へぬのに、早くも戦線に臨むの意氣を咬られたことであらう。

斯くて都會も、村落も、全くどよめきの中に日を迎へたり送つたりした。而し、其どよめきには重々しひ響きが籠つてゐて、些少の『浮薄』をも認め得なかつた。——打てば音を發するやうな、引き締つた色彩の表現であつたのである。

『軍國の意氣！』確かに是れを然ういふんであらう。

どよめきに明けてどよめきに暮るゝ岳南の地、人は徒らに騷忙の筈に追ひ廻はされてゐたけれど、富嶽の秀麗は巍然として悠悠其の雄姿を誇つてゐた。

悠然と層雲に嘯く靈山の偉峯よ、將に大任に赴かんとする岳南健兒に對し、一種の高遠なる暗示を餞けるものゝやうに仰がれた。

(二) 首途の盛宴

知事湯淺倉平、地方裁判所長下山英五郎、檢事正熊田勘太郎（大正三年十月二十八日退職）市長小森慶助、紳商尾崎伊兵衛の五氏の主唱に基く岳南將士送別の宴を十月三日午後四時を以て浮月樓に開催、壯舉の首途を大に祝福しやうとした。出席申し込者忽ち五百餘名、國民的意氣の發露は、此んな處にもうかがはれた。聴て、其の日は來た。——空、晴れて風、清々しく、駿府城頭に聳ゆる富嶽の雄

姿は、更に一段と『偉』を加ふ。

拂曉——六萬市民の眠りを覺して秋空高く轟き渡つた三發の煙花。それは、意義深き、今日の別離の宴を報ずる狼火であつた。定刻前に八十の主賓と、五百餘の會員と知事以下の發起人は早くも會場へ參集し、煙火數發、大送別會は此處に開かれんとする。會場は、東海の名園と稱せらるゝ大庭園——數寄を凝した林泉の美は、深ふなりまさらんとする秋色に、一入の趣きを湛えてゐた。池の水に映る一片の夕焼け雲の紅にも、今日の催しの意義を表現してゐるものゝやうであつた。

理事官久保豊四郎、助役水野富三郎の兩氏を係長にする縣市合同の會場設備係りが設へた諸般の裝飾は、悉く園遊會風ではあつたけれど、萬歳の二字をイルミ子・シヨんで現はした趣向は、誰れも彼れも手も拍つた。

開會を報ずる數發の煙火——廳で、小森市長の開會の辭に次いで、湯淺知事は其の巨軀を壇上に運んだ。そして

『戰雲一度歐洲の野に動きて、災禍遂に極東に及ぶや 聖斷忽ち戰を獨逸國に宣し、以て東洋の平和を確保し、盟邦協約の義を明にし給ふ、貔貅幾万既に山東の野を壓して捷報荐に臻り、官民一致深く聖旨を體して拮据軍國の事に努む、亦盛なりと謂ふべし、惟ふに我天皇踐祚未だ幾許ならず時尙ほ諒闇の間に在り、常に平和に眷々たるを以てして而も竟に宣戰の大詔を下し給ふに至る事洵に己むを得ざるに出づ、六千萬の臣民誰れか感奮興起せざらんや、蓋し我陸海軍は過去の二大戰役に於て連戰連捷赫々たる武勳を樹て、國威を八紘に輝かせり、今や皇師三たび起て征戰の事に従ひ、一舉直ちに東洋禍亂の根源を衝かんとす、其の嚮ふ所銳鋒鐵壁を碎き馬蹄堅壘を蹴て速に平和を永遠に克復し、國威を宇内に宣揚する期して俟つべきなり、今や我が岳南の健兒命を奉じて山東に向はんとす、籌謀畫策堅塞を突き、鐵壘を破つて胡虜の心膽を寒からしめ以て克く日東國民の清華を發揮する懸つて其の雙肩に在り、軍旗の輝く所 明

治天皇の神靈燦として加護を垂れ給ふ、吾人國民亦一致結束して各其分を竭して、軍國後援の實を擧ぐるに於て敢て違算なからんことを期す、冀くば獅子一吼直に禍源を掃蕩して克く常勝軍の名譽を完ふし、以て陛下至深の御大心に對へ奉らんことを、茲に本縣官民有志を代表し敢て蕪辭を陳ぶ』(下略)

云々と云ふ意味で一場の訣別の辭を朗讀し終るや、主賓總代淨法寺少將は、其の莊重な瘦軀を壇上に運ぶ。憂々と鳴る佩劍の柄を見ずや、精巧を極めし恩賜の日本刀一口、一千に近い人々の視線は、一時に少將の身邊に注がれた。そして、浴びせるやうな急霰な拍手——拍手の響きの薄いだ時、徐ろに少將は口を開いた。曰く

『私は陛下の天命を拜して今や征途に就かんとするのであります。偶々諸氏の熱誠なる輿望に對しては、唯感謝の外ないのであります』云々。

斯うした簡單な答辭、而も其の言々句々には得難い權威があつた。汎ゆる修飾を避けた素朴な其の使用語の中には、却つて修飾に優る光りがあつたのである。群衆は、

再び一齊に拍手喝采した。

天皇陛下萬歲。
 岳南旅團萬歲。

群衆の高唱する斯うした聲々が、夕暗の都會の隅々にまで鳴り響いた時、列席の主客は、『軍國』の凡てが其處に躍動するのを認め得たであらう。

眼に美しい裝飾電氣の下で頻りと幹旋する藝妓の群——そりり立てる樂隊の旋律——年少將校の快濶な高笑——然う云つた此の活畫の中で、最も會衆の眼を惹きつけたのは八十の主賓の胸に薫る櫻花の徽章であつた。大和民族の悉くを代表せる櫻の花の徽章であつた。

花は櫻木、然うして人は武士である。

夜に入つて閉會した。——紀念すべき悲壯の別離の盛宴は、斯くて全く閉會を告げたのである。

その翌日だつた。濱松市の國光館では、午後二時から湖東の一聯隊に對し、浮月樓の宴と同じ意味の別離の催しがあつた。國光館の名——何んといふ意味深い文字であらう。殊に、静岡の人達ちよりも、何んぞと云へば必ず華美を競ふ習俗を有する濱松の人達ちは、紀念すべき此の催しに對して、随分思ひ切つた趣向を整へたのである。

小西市長の開會の辭、湯淺知事の演説に次いで、演壇に起立したは當日の主賓總代高野歩兵大佐である——莊重の言句を以て編まれた其の一場の答辭——會衆は等しく熱誠を罩めた拍手喝采を、大佐の一身に浮びせたのである。斯くて、壯烈の裡に宴は移つて行つた。

此の日、最も會衆の腦裡に印象せられたのは、濱松市男女小學校生徒の合唱した

次ぎの軍歌の一曲さりであつた。

『天皇陛下の御爲に鐵砲擔いで劍下げて、お出掛けなさるお姿は、誠に立派でございます。御國の爲に手柄して、金鷄勳章胸にかけ、萬歳唱へて歸るやう、兩手を合せて拜みます。』

幼い小國民の等しく高唱する作るはぬ措辭の此の唱歌に、將校も、兵卒も、窃かに涙を呑んだであらう。軍服嚴めしい幾多の將卒をして悲痛な思ひの中に「何うしても克たねばならぬ」の強い意氣を喚起せしめた動機の一半は、蓋し、斯うした可憐の小後援者に頼たねばなるまい。

偉なり、詐はらざる小後援家の力よ。

其七 健兒の向ふ處

(一) 膠洲灣の防備

岳南の健兒の向ふ處は、膠洲灣内の一要塞、青島城であつた。其處に堅塞を構へて東洋の平和攪亂を策せんとする獨逸軍隊を、大に膺撃するの榮譽ある而して重大の使命を帯べるのであつた。

富士の靈峯に育くまれし精銳の岳南健兒を、迎へ討たんとする膠洲灣内諸要塞の防備や果して如何ん？ 歐洲に初めて戰雲活動した等時、早くも延いて極東へ是れが波及すべきことを透察した我が一軍事通は、膠洲灣防備の概要だと稱して次ぎの如き説を發表したことがある。

陸上の防備としては、租借地と警備區域(中立地帯)の中間にある柳亭より青島に達する鐵道に沿ひてピスマルク、モルトケ、イルチスの三砲臺あり、以て青島の背面防禦を爲す、而して此等砲臺に於ける守備兵力を擧ぐれば、ピスマ

ルク砲臺の兵營には、第三海軍歩兵大隊即ち四個中隊、モルトケ砲臺には騎兵一個中隊、野戰砲兵各一個中隊宛屯營し、更に青島街を中心とせるイルチス兵營には、第五海軍砲兵一個大隊あり、之れに北支那駐屯軍の海兵分遣隊三中隊を合せば、總員約四千五百に達すべく、前年少將に進級せるマンエル、ワルデック少將之が總司令官たり。

膠洲灣守備兵力は以上の如く其數大ならずと雖も、租借地の三方は海に面し殊に其北方海面は嶮山若くは斷崖絶壁を以て圍繞し、容易に上陸する能はざる要害なり、而して各砲臺は何れも最新式築城法に則り、最近之に各種の副防禦を急施しつゝあれば、獨人の難攻不落と稱する敢て過言に非らざるべし、尙同灣海面に對しては其存否明かならざるも、二三の海岸砲臺を有し各砲臺の備砲は其數尠からざるべし。

尙ほ青島要塞には專屬飛行機隊あり、現に單葉飛行機(ルンブラー式?)三

臺、複葉飛行機一臺を有し數日來絶えず灣口に飛行近海の偵察に従事しつつあるが、最近の電報に依れば此内一臺は破損せりとの報あるを以て有効に使用せらるべき飛行機は尙三臺を有せる譯なり、要之膠洲灣の防備は、其租借以來日尙淺きも爾來之が施設に約二億馬克の巨資を投せりと云へば、容易に輕視すべからざるものあらん云々。

● 歐洲動亂の發生する少しばかり前、折柄我が長崎港に碇泊して居たフオン、スピ
 1 提督の統卒に係る獨逸東洋艦隊の主力シャルホルスト號、グナイゼーナウ號（兩艦共一万一千四百二十噸、速力二十二節半、千九百六年進水）の二艦は、南洋巡航の名目の下に、漂然長崎港を拔錨したまゝ、杳として其の消息を絶つて居たが、國交斷絶の當時、一消息通は次ぎのやうに語つてゐた。

行方不明の軍艦は時節柄好奇の焦点となりつゝあるが、最近に至りサモア島を出發北行せりとの情報ありたるも其の行先は勿論何等の消息を知る事能はず

りし處更に最近聞く所に依れば、北緯十五度東經百二十度前後の地点附近に在るものゝ如し、而して膠洲灣に在泊せし三等巡洋艦エムデン號（三千五百四十四噸、速力二十四節半）は其の餘艦と共に前記主力艦の二隻と近く集合して一大勢力を形成せんとするものと想像せらる、其他膠洲灣内に尙ほ碇泊中の軍艦の的確なる數は不明なるも、小型砲艦のシヤグラー、ルツチス、タイガー、イルチスを始め、特務艦チタニア及び驅逐艦エヌ九十號等の劣勢なる若干の軍艦のみと觀て大過なからん、埃國東洋唯一の派遣艦カイゼリン、エリサベット號は、膠洲灣内に碇泊しつつあり云々。

以上を以て膠洲灣の軍事的防備の程度は、略ぼ察知することを得たけれど、軍事的立場を離れた經濟上の價值——即ち商業地乃至工業地としての價值は何うであらう。我が外務省當局者の聲明する處に依れば、獨逸政府が膠洲灣の租借と同時に同地方の鐵道敷設權及び鑛山探掘權を得たものは、山東鐵道會社（本社青島、其組織

は我日本の滿鐵の如き性質の會社（資本金五千四百萬馬克にして、現在膠洲より濟南に至る線路の既成線路外に、膠洲より濟州を南に廻り、濟南に行く線路を得たこともあるけれど先年之れを支那に還して、津浦鐵道の北一部を得た。之れはモウ二三年前に獨逸の技師の手に依つて開通するに至つた。獨逸政府が此等の鐵道敷設に費した經費は、約八千萬圓だと傳へられる。

鑛山の探掘權は上記鐵道沿線の左右約四里弱以内の地方を獲得してゐるが、此の事業に就て獨逸政府は德華鑛務公司（資本金六十萬圓）山東鑛山會社（資本不明）を組織し、石炭及び金鐵の探掘をなすつゝありて現坊子、淄川、博山の三炭坑は其他量無盡藏だといふ程だ。其外獨逸民間有力者十六名は、同政府援助の下に更に德華鑛務貿易公司を百三十萬馬克の資本を以て組織し、其後百六十萬馬克に増資したが設立の翌年同會社は獨逸議會の決議に依り、左の五ヶ所の鑛山探掘權を得るに及び現在盛んに探掘を試みてゐる。

- 一、沂洲府城の南方沂州の左岸の地域（寶石）
- 二、沂木縣城の周圍の地域（鐵、石炭）
- 三、周村東部及南部の地域（金、雲母）
- 四、濰縣の東南に於ける地方（石炭）
- 五、即墨縣東部全体の地域（石炭）

等であるが、此の外前記坊子鑛山の炭田の豊富なること我撫順炭田の比にあらず、山東鐵道の開通と共に日々其産額を増しつゝある。之れに對し、獨逸一技師の調査に依れば、其炭量一億萬噸にして、而も全部無煙炭或は黒炭だと云へば、大なる寶庫たるを失はなす。

獨逸政府が巨額の資本と、最高文明の科學とを應用して二十年近い長日月、苦心經營した膠洲灣は、斯くの如く權威あるものであつた。而し、一朝、日獨兩國の國交斷絶して、我が帝國政府は其の獲得せる自由行動の權利の發動の下に、今や膠洲

灣を一舉にして屠らんとするや、灣内の各地は遽かに動揺し、權威ある物質の一要港も、劔の前には怯々然、眞に哀れむべきものであつた。國交斷絶の當時、次ぎの如き情報が頻りと傳へられた。

膠洲灣内勞山港附近に水雷を沈設し、防備嚴なり、察するに同港は獨逸海軍の根據地なるべし——獨逸軍隊はカイゼル陛下の嚴命により、青島を死守すべきも我最後通牒により勝算なきを知れる事として士氣沮喪し、カイゼル陛下を怨むもの多し——獨逸の婦人、子供を載て同地を出帆せる漁船二隻の内、一隻は佛國軍艦に他の一は英國軍艦に拿捕せられ、昨日威海衛に入れるが、同地を脱出せんとするもの益す多き形勢なり——英佛艦隊は昨今青島の近海を遊弋しつつあり。

之れを通じて見るも、如何に青島籠城軍の恐慌せるかを窺ひ知るに足る。蓋し、噴火山上に座するの思ひとは、彼等當時の心理状態であつたらう。

(二) 快報耳に懐し

我が岳南の健兒へ動員令の下る前、既に出征の魁を命ぜられた久留米第十八師團の猛將勇卒は、長崎港より乗船、九月二日、何等遲滞なく龍口に上陸して以來、次ぎの如き戰鬪經過の下に、其の威武を大に發揮した。(以下出征軍司令部發表)

上陸以來稀有の暴風雨に遇ひ其行動上多大の支障を來したるも、勇敢なる我將卒は克く萬難を排し先遣旅團は九月十八日を以て即墨に展開、勞山灣に迂回せる左翼枝隊も十八日を以て敵前上陸を敢行し十八、十九の兩日に於て張村、龍樹臺の線を占領し、茲に第二期の戰略開始を終れり、斯くて河川の出水と道路破壊の爲め著しく遅延せる輜重縱列は、廿五日即墨に到着、師團は直に翌廿六日第一期の運動を開始せり。

此時敵の監視哨は我右翼に對しては女姑山、狗頭埠、西黃埠に、我左翼に對

しては龍口汗河の線に山頸を扼し居たるが我軍の進撃するや何等抵抗を試むる事なく後方の陣地に退却、更に我軍は夜陰に乘じ襲撃を加へたれど樓山後の南方高地に據守せる敵は、容易に後退せざるのみならず、敵艦イルチス、埃國軍艦カイザリン、エリザベット及び驅逐艦エヌ九十號の三隻樓山驛の海岸に出動し、盛に砲撃を開始し少からず我軍の前進を妨害したるも、我軍は其夜遂に同陣地を占領せり、而も滑稽なりしは樓山驛の陣地にボール紙を以て製造せる多數の偽兵を並列しありしことなり。

廿七日我師團は目標を李村河の線に取りて前進し、敵は我が右翼部隊が李村及び左翼部隊が張村の線に進出するや、其の第一防禦陣地たる巫山、孤山の線より猛烈なる砲火を送り來り、敵の驅逐艦エヌ九十號又盛に李村を砲撃し、右翼の前進は頗る困難を感じたるも漸く午後四時に至りて之を占領すると同時に前面の敵情を偵察する事とせり、然るに前面の敵情は其防禦比較的堅固ならざ

る事を確め得たるを以て我師團は同夜直に夜襲を強行する事に決せり。

先づ中央部隊は廿八日午前零時半八十八高地に到着し、右翼は午前四時左翼は午前五時を期し、敵の監視兵を驅逐しつゝ豫定線内に到達、左翼部隊は巫山占領部隊として歩兵隊を派遣し峻嶮なる巫山の左鞍部を迂回し、敵の背後に出て、激戦の末拂曉同陣地を占領せり、此の戦闘に於て我中隊長及小隊長は共に壯然なる戦死を遂げ、敵兵八十名を捕虜とせり、次で八十八高地も午前五時半を以て我軍の有に歸せり、斯くして我軍が漸次敵の第一線に肉薄するや、左翼巫山の鞍部に據りし敵の重砲二門は勿論、各山頸に據れる砲隊は猛烈なる砲撃を開始したるを以て我軍は此時後方に在りし野戦重砲隊をして急速戦闘に参加せしめたるが、其砲撃の結果實に偉大なるものあり、我左翼支隊は獨力前面の敵を撃退すべしと師團司令部に於て命令を發すると共に我右翼に對しても攻撃命令を發し、廿八日午前十時頃各隊共敵前二三百米突の近距離に肉薄、茲に敵

の第一線に至る總攻撃の開始を見たり。

此時敵の前記三軍艦は再び滄口沿岸に出現し、我右翼軍に向つて砲撃を加へたるより、我軍又野戦重砲隊を滄口に急派し敵艦と猛烈なる砲火を交へ、遂に廿八日午前十一時半より正午に亘りて、巫山の西鞍部より孤山に亘る敵の第一線を確實に占領せり、此の戦鬪に於て我軍は敵の大砲四門を鹵獲し、更に滄河にて砲彈二三百個を遺棄退却せるを發見せり、敗走せる數は海泊河の防禦線に占據し我軍は目下前面の敵情を偵察すると同時に着々占領工事を進捗せしめつゝあり、我軍の戦線の延長は約一里半に亘り、敵の防禦線との間隔は實に約三千米突に過ぎざる也云々。

聞くだに軍國男兒の熱血を踊躍せしむる其の戦鬪經過——而も『占領』といふ文字と『撃退』といふ言葉が、如何に耳懐しく響いたことであらう。十年前の征露役以來、軍國男兒の絶えて耳にせざる夫れ等の熟字の響きは、早天に雲霓を望んだ時

のやうに、隅々へまで力強く泌み込んで行つた。

陸に快報滿つ。

海は、果して何うであらう。

海軍司令部は、當時斯う報じてゐた。

我第二艦隊司令官加藤定吉中將は、去る八月二十七日以前、全力を率ゐて其根據地を出發したるが、前日來の大颶風の餘波を受けしことゝて、航海の困難は蓋し想像以上でありしものゝ如し、斯くて、二十七日の拂曉には、既に全力を擧げて膠洲灣外數十海里の沖合に達したり、茲に於てか各部隊に夫々各種の戦鬪任務を授けて、附近數十海里の海上を隈なく搜索せしめたり、依て各隊は直ちに活動を開始し行く／＼海面を搜索しつゝ、漸次膠洲灣に接近し、同灣前

面の海上は勿論沿岸到る處に敵の隻影なきを認めたり、此行動中同灣に最も近き艦艇は港口迄近づき、港口燈臺の砲火の及ぶ範圍に迄進出して勇敢なる偵察を試みし結果、敵は全部港口内に遁入し、外海には最早一隻も其姿を認めざるを確め得たり、此沈着にして秩序整然たる敵前壓迫中我驅逐艦は、彼のイルチス砲臺其他の諸砲臺より、猛烈なる十字砲火の亂射を浴びせ掛けられしも、我が海軍の巧妙なる艦艇操縦法は、能く此の敵の砲火の間を潜りて頗る機敏に進退したるを以て、敵弾一も命中するに至らず、随つて我全艦艇は何等の損害をも蒙らず、港口附近の状況を遺憾なく偵察して其使命を完うし、悠々として豫定の水面迄引揚げたり、而して目下我驅逐隊の多數は、同灣間近の哨海勤務に服し居れり、尙は加藤第二艦隊司令長官の報告中の一節には右の任務遂行に當り、我海軍は膠洲灣の港口附近水面一帯に亘り、無數の機械水雷が各所に沈置されあること、思料し居たるに、此の大危険を冒して敵前壓迫の壯舉を取行せ

しに拘らず、不思議にも我艦艇の水雷に觸るゝもの一も之れなかりしは、到底人間業とは覺えず、之れぞ一に我 天皇陛下の御稜威の然らしむる所なるべしとて將士一同深甚なる感激に打たれつゝありとの旨を特に附言しありたり云々。海にも、軍國男兒を首肯せしむる便りが多かつた。而も、以上の海陸快報に加へて、我が飛行隊の大に活躍したといふ一事は、所謂「日東常勝國戰史」に新しい記録を残したものであらねばならぬ。當時、海陸兩飛行隊の活動は頻々として傳へられたけれど信すべき筋のものとしては、九月十六日、海軍飛行隊の山田大尉、大崎中尉搭乗の一飛行機が、膠洲灣内及び青島市街の上を旋回し乍ら縦横無盡に飛行し無線電信所及び、熾に煤煙を上げつゝある發電所の煙突に爆弾を投下して、一彈は煙突を破壊し、更に灣内に碇泊せる百噸の大型汽艇に投下して命中せしめた。そして、更に同日和田大尉、武部中尉の搭乗せる他の飛行機は港内の海上を縦横自在に飛行して海上の光景を手取る如く偵察したといふのと、陸軍飛行隊の動作とし

ては、曰く「我陸軍航空隊は龍口上陸以來數回の敵偵察を試み着々奏効しつつありしが、最近に至り敵の砲艦は屢我右翼軍に巨弾を見舞ひ、軍事的行動を妨害するより、九月二十七日午前六時三十分、先づ即墨航空隊は格納庫より三臺の飛行機を引出し、長澤中尉は佐藤中尉を同乗せしめニューポール式單葉に、眞鍋中尉は武田少尉を同乗せしめてモ式三號に、續いてモ式八號は、坂本中尉織田曹長を同乗せしめ、何れも根據地を離れて見事に飛翔し敵の陣地を突破して膠洲灣上の高空に舞ひ、灣内滄口方面に潜める敵の砲艦及び驅逐艦に向つてモ式の二機は、各三個宛携帶せる爆彈を投下したが、ニューポール式は今や爆彈の尾栓を抜かんとする時、投下手佐藤中尉の座乗機に機關銃の貫通を受け、危険なりしもよく大膽に任務を遂行した、又モ式八號の如き翼及び機体に十餘發の敵弾を受け、モ式三號は機關銃及び同砲彈三個命中したけれど、操縦者及び投下手には何等の損傷を負はず、悠々として歡呼の裡に出發点へ歸着した」云々といふにあつた。

何時、實戦に使用されるやらと思はれた飛行機が、斯うした働きをなしたといふことを、目前り示された我が帝國上下民衆は、進歩せる科學の力を今更ら痛切に驚異せずにはゐられなかつた。

——快報の魁！

それは、九月十二日を以て我が軍が確實に即墨を占領したといふ飛電であつた。即墨は、山東半島に於ける有數の大都會で商業地として名のある一古驛である。城内と城外と合せて約六百五十戸の人家あり、戰國時代には彼の名將田單が、火牛の計を用ゐる燕軍を塵殺して七十餘城を奪つた、古戰場として有名な所、白沙河迄は四里、青島の要塞地域までは未だ七里餘ある。即墨は獨逸の租借地ではないが、租借地との區域になつて警備區と唱へ、獨逸兵は同地に入る事を得るけれども支那兵は獨

逸の許可を得なければ入る事はならぬ。元來即墨は平地なれど之から獨の租借地内は、山又山で要塞地帯となるのであつて、白沙河以南にも敵軍が居る譯であるから、戦争は今後に在る。

それから、戦局は日と共に開展して、白沙河右岸流亭附近に於ては、約一時間に亘る激戦が演出せられた。其の結果は、無論我が軍の有利で、快報の一ツとするに充分であつたけれど、悲痛なは中隊長騎兵大尉佐久間善次氏の戦死であつた。

青島攻圍軍最初の犠牲者！勇壯の裏に悲痛を含んだ此の文字のために、泣く者は獨り其の遺族のみではなかつたのであつた。

佐久間大尉の最切に流した尊い犠牲の熱血に、益す士氣を鼓舞せられた我が攻圍軍は、更に勇躍一番、愈々其の精銳を發揮した。——即ち、岳南の健兒に動員令一下して、士氣昂然たる九月の下浣、既に、青島の本壘へ、僅か二里の近距離な地点にまで肉薄したのである。

海には、膠洲灣口の封鎖斷行と掃海作業。

海陸併せ攻むる常勝軍の堂々たる其の勇姿！聞くだに壯烈の極、今にも『青島陥落』の一大快報が訪れるやうに思ひなされたけれど、經營二十年、最新式の築城法に則れる其の堅塞は、流石に獨人の難攻不落と稱するだけの價値があつた。

十年前、旅順口に於ける要塞戰の實驗を嘗めて、今や、戰術の遙かに進歩した日本軍が、旅順口以上の堅塞を構へて傲然たる獨逸軍を討たんとす。其處に興味津々、日獨兩國民は勿論、歐洲列強も、歐洲大戰の經過を環視する其の多忙の中から、此處、山東の一角に注意深い視線を注ぐことを忘れなかつた。

當時、倫敦タイムスは、我が青島攻圍軍を論評して曰く

膠洲灣の獨逸租借地に對する日本の作戰に關しては當國公衆(英國を指す)の言説に上ること頗る尠しと雖も、是れ決して日本の努力を十分に認識せざるが爲めにあらず、更に重大なる出來事が急激に簇生しつつあるの結果に外ならず

吾人は遠からず青島が海陸兵に全く包圍せられたりとの報道に接するを期待す日本は獨逸兵を間斷なく攻撃して防戦に暇なからしむべしと雖も、而も當年二〇三高地に於けるが如き多大の犠牲を要する戦術を繰返すの要あるなし、獨逸は窮迫の餘り日本軍の支那領土通過に關し、支那に威嚇を試みんとしたるも其威嚇は輕侮を以て迎へられたり、北支那に於て獨逸皇帝の命令の下に獨逸軍の犯したる暴行は、北京より長城に至る地方土民の忘れざる所なり、獨軍を支那より驅逐するは是れ正當なる報復行爲に外ならず、吾人は日本に對し其勇敢なる努力の、完全なる成功を祈るものなり云々。

斯くて、正義の前には、何人も異議を唱ふる餘地がなかつた。

其八 その夜の首途

(一) 征人月下に立つ

大正三年十月の四日と五日。

それは、岳南人士の最も紀念すべき、征人、征途に上るの日であつた。貔貅幾千劍を鳴らして山東の野に討つて出づる鹿島立ちの日であつた。

——今日の首途を盛んならしめんものと、數日前來、岳南の一都會と程近い湖東の一都會は、山間僻地の各方面から蟻集して來た健兒の身寄りの人々の爲めに、平素に數倍した賑ひを呈し、殊に

『イザ出る』

と云ふ前夜のざわめきは、物凄い程であつた。

——四日の未明、未だ啼かぬ一番鶏の夢を破つて突如、太く、力強く、停車場のあたりで轟く狼火のやうな

『萬歳！』

の聲々は、岳南聯隊の先發中隊を送るの譏別であつた。澄み渡つた秋の夜の、透徹した空気を傳はつて、全市民の耳に入る此の萬歳の聲、全市民は今更ら身心の踊躍を覺えずには居られなかつた。

その日は朝から夕刻まで、秋の日のぼか／＼と照り渡つた。快い、そして小春日和を思はする暖かい日であつた。

富士の靈峯は、何日ものやうに、氣高い偉容を誇つて居た。

征人は、軍用列車の窓から、遙かに其の偉容を望みつゝ、何回も、何回も、西に向つて走つて行つた。其の都度、停車場は勿論、構内から遠く安倍川の鐵橋あたりへまでも、沿線兩側に人垣を結んだ黒山のやうな見送人は、男らしい車輪の響きを

立てた軍用列車に、各自手にする小旗、町旗をハタ／＼と打振つた。そうして、萬歳、萬歳を連呼したのであつた。——聲を噓らしたものもある。而し、張り詰めた軍國の意氣——觸るれば忽ち燃えるやうな熱血の、進る程に張り詰めた其軍國の意氣は、一噓れた聲を叱咤して、尙ほも『萬歳』の二字を絶叫せしめたのであつた。

——午前十一時何分——それは、軍旗の首途であつた。最も、榮譽ある軍旗の首途の時間であつたのである。

仰がずや勇ましき進軍喇叭と、研ぎ澄ましたる銃劔とに擁せられた岳南聯隊の其の軍旗を！

破られたる軍旗の姿——それは、岳南健兒の、赫々たる武勳を語るものであらねばならぬ。思ひ起す十年前の征露役、首山堡の戦ひで如何に苦戦であつたか——而

して、今、征途に上らんとする健兒の父と兄とが、如何に善戦奮闘、君國のために盡した忠勇の將卒であつたかを。

颯爽たる秋の風に、今にも軍旗の偉勳が、芳ばしい匂ひを放つやう。――
巷に満つる幾萬の人達ちは、之れを仰ぎ見て、忽ち襟を正した。そうして、一齊に脱帽した。威風凜然、四邊を拂ふものゝやうに、軍旗は肅々と潮の如き人混みを縫つて行く。

『十年前に増る勳功あれ』

仰ぎ見るものゝ誰れ彼れは、竊かに斯う念じたことであつらう。

大輸送は、其の夜の九時までつゞいた。

夜に入つても、停車場附近の人混みは減じなかつた。否な、寧しろ、黒山のやうな驛前の人達ちの所持する提灯と、沿線兩側の見送り人の、各自手にする小提灯乃至万燈に、灯が点火つて、一入の美觀を呈し、萬歳の聲と共に、之れが一齊にゆら

ゆらとゆらぐさま、『出て行く人』の士氣を煽るに充分な力であつた。

――全市は、無論各戸毎に軒提灯を出して居た――『何會』『何町』『何村』然う云つた文字を記した高張提灯が、停車場通りから附近各町一杯――殆んど眼に入る限り打ちつゞいて所謂『灯の海』のやうだつた。其の中を

『しつかりやれよ』

『よし大丈夫だい、うんと遣るぞ』

『生きて歸ると思ふなよ……』

『歸る時には金鵝勳章さ』

『頼むぞ』

『心配するな』

此んな力強い、そうして簡單な言葉が、隨所に取替はされて居た。

――その夜は、恰も仲秋の月。

蒼々たる月光下に立つ征人の姿——殊に月影に映じて、彫刻でもあるかのやうに思ひなされる、其の面貌は、凄惨な氣と、悲壯の氣の充實したものであつた。

汽笛の音。

煙火の放揚さるゝ爆音。

斯くて、最後の征人も、征途に就いた。

其處に又た萬歳の聲が天地を震撼するやうに響き渡つた。そうして、提灯の海と

小旗の山が、雪崩のやうにゆらめいた。——列車は去つた。窓から洩るゝ電燈も、

モウ全く見られなくなつた。今まで緊張し切つてゐた幾萬の見送りの人達は、恰

も失心したものゝやうに、今更ら線路をぢつと視た。

更け行く秋の夜に、月は愈々冴え切つて、記念すべき今宵の凡てを、隈もなう照して居た。——

濱松聯隊の出征は、その翌日の五日であつた。

——午前八時二十分から、午後十二時三十五分まで——岳南聯隊の首途の日と同じく、雑踏の巷を現出したのである。そして、その聯隊の健兒は幾萬の人々の叫ぶ萬歳の喊聲よりも、プラットホームに整列した軍國の少年と、軍國の少女の合唱する次ぎの軍歌のために、山をも抜かん昂然たる士氣の踊躍を唆られたのである。

輝く軍旗

輝く軍旗を先に立て

勇める壯夫數千人

忠もて固しこの精神

死生ものかは大君に

濱松六十七聯隊

獨軍屠るも時の間ぞ

義をもて鍛しこの身体

盡す誠の一つのみ

盡す誠の一つの
聲を傳へよ松の風

膠洲灣頭かちどきの

(進め矢玉調)

四日と五日――

斯うして、駿山遠河のことごとくは『壯烈の意氣』のために、全く風靡し盡されたのであつた。

(二) 出征の跡

出征の跡の静けさ。

市内の各民家と寺院に分宿して居た補充兵が、全部聯隊兵營へ這入つてしまつてからは、一層の静けさであつた。晝は慰問袋の募集に奔走する奇特な人達ち――夜は、氏神其他の神々へ、健兒の武運長久を祈る信心参りの人達ちの忙しげに、行き交ふのみ殖えて行くのであつた。

而し、何處へ行つても、『出征』といふ事實の生み出した、いろ／＼の興味ある附帯事件の噂で持ち切つてゐた。曰く

豫備歩兵一等卒として召集せられ出征の途に就いた駿東郡御殿場町仲町眞綿文吉氏(二十五才)は妻くに(二十四才)との間に長女定子(二才)といふがあつた。而し、妻女は常に多病であつた。そうして間もなく歿した。――日雇稼ぎの細い家計の炊煙は、之れが爲め一家を一層赤貧のみじめな境遇へ落ち入りしめた。

俄然召集令。

文吉氏は、全く途方に暮れてしまつた。而し、一緒に召集令を手にした他の在郷軍人は、モウ腕を叩いて興奮其の極に達し、郷黨は擧つて、盛んな送別會を開き、大任に就く健兒の行を賑はした。文吉氏は、男泣きに泣いた。――戰場に馳せて故國のために盡す意氣は、何人にも後れはせぬけれど、氣懸りなは此の定子――此う思ふて彼れは幾度びか斷腸の心に泣いたのであつた。召集の日は來た。如何んとも

することが出来ない。——文吉氏は、遂ひに其の前夜意を決した。そして密かに定子を抱へて御殿場の自宅を脱け出て、沼津に赴き、更け行く夜の暗に紛れて某家の軒下へ定子を棄兒し、恩愛の絆を犠牲にして、召集令に應じたのであつた。

而も、其の時、定子の懐ろへ潜ませた文書の一通。

『此の兒を頼みます』とあつた。

文字は尠なうても、一讀肺腑を扶る悲痛な其の意味に、泣かぬ者として一人もなかつたのである。——

濱松在犀ヶ嶽青年會は、其の會員古橋縫次郎、和久田文平、中村實の三氏が出征するに當り、大江丸、兼時、關兼重の銘のある日本刀一振宛を贈與し、之を以て一身を君國に捧げ、壯烈なる働きを爲すべく激勵した。

榛原郡吉田村鈴木由藏氏長男鈴木和作氏(廿五才)は、這回輜重輸卒として出征相當の資産家に生れ、馬匹取扱ひに馴れないので其の出征の日、父は停車場に之れを見送り、馬の荷物の手傳ひ扱した後、餞別の日本刀を手渡し、決して内の事は心配するな、萬一の時は此刀で潔く割腹せよと激勵したといふ。

磐田郡井通村増田林平氏(二十五才)は征途に上ることゝなつた爲め、同村在郷軍人分會は規程に依り、金二十圓を贈るべく、分會長長谷川中尉之を携へて出征の日停車場に來たり、贈與した處、林平氏は、折角の厚意なれば有難く頂戴すべしとて押戴きたる後、失禮ながら自分より以上に困難な他の出征軍人家族保護の爲め、寄附したければ、宜しく取計らはれたしとの事に、長谷川分會長も其意を諒として受諾した。

濱名郡入出村吉川源吉(七十五才)は、妻さく(七十才)と長女つる(二十一才)と源勘市(二十五才)の四人暮しであるが、源吉は貧困な上に多年中風症の爲め、不具同様の身となり、妻さくも追々奇る年波に稼ぎもならず、長女つる亦先頃來リウマチスに悩まされて、病床に呻吟し、一家は勘市氏の手一ツにて辛くも其日の煙を立て、居た處、這回勘市氏が出征の途に就きたるにぞ、残れる一家擧つて病床に枕を並べ其日の糊口にさへ窮するより、濟生會へ救護方を願出てたといふ。

庵原郡江尻町辻村の漁師深澤金兵衛(五十九才)は妻ゆき(五十七才)の間に長男平次(二十七才)次男鐵藏(二十四才)長女ふさ(十九才)の三人の子女を持つてゐた。而し今度、平次、鐵藏兩氏は豫備兵として應召、又隣家に嫁いだふさの夫松尾左市氏(廿五才)も同様共に出發した爲め赤貧な金兵衛一家は忽ち三人の働き人を失ひ糊口に窮することゝなつたので、郡役所並に役場は家族救護の協議中であるけれど、

金兵衛は、「伴二人と娘の婿で都合三名留守になりましたが、皆の者が手柄を立て、無事な顔を見せる迄は、婆さんと二人で石に噛ちり付いても生きて居ます」と語つてゐるといふ。

静岡市安西南裏町十七田中三吉四男力藏氏(二十三才)は、大正元年水兵を志願し横須賀鎮守府の機關兵として勤務中、成績佳良のため一等水兵に進んだ。偶日獨開戦となるや、志願して決死隊に編入され、特別任務を帯びて戦場に向ひ今や第二艦隊附驅逐艦に在り、此んな手紙を家郷へ寄せた。――「時下秋冷の候御無沙汰に打過ぎ候、皆々様御變りも無之候や御伺ひ申上候、私事も無事勤務罷在候間は、かりながら御休心下され度、尙戦争も昨今非常の優勢にて飛行機の爆彈落下するものあり海中には機械水雷の爆發するあり、爆彈は地上に飛び、或は破裂或は海中に落下して破裂する等、戦場とは云ひながら頗る面白く御座候、他は後便に委細申上

べく候』云々。

濱松市砂山豫備歩兵一等卒松下喜代藏氏(二十七才)は妻はな(二十二才)と二人暮してあるが、召集の内命あるや、直に建物全部を賣却して、代金を妻に與へ、一先づ實家に歸して後顧の憂を絶ち、召集の日を待つ内、果然召集せられたので躍如として妻に向つて曰く『自分は這回堅き決心を以て本分を盡すべければ、萬一の場合には適當の營業を爲すべし』云々と諭して入營したにも拘はらず、不幸補充隊へ編入された爲め、非常に遺憾とし血書を認めて出征隊編入の儀を出願した。而し、容易に採用されなかつたけれど、飽迄素死を貫徹せざれば止まずとの決意の下に、中隊長を経て聯隊長の面前に陳情した。——聯隊長も其健氣さに心動かされて、其意を諒とし、遂に出征隊に編入、五日意氣昂然、征途に上つた。爾來妻は掛塚の生家において、家業を手傳ふ傍ら、朝夕氏神社に皇軍戰捷と、夫の奮闘を祈願して居る

さうだ。

安倍郡有度村出身の歩兵上等兵池田可吉氏(二十四才)は、血書の從軍志願書を島田第二大隊長の許に差出した。其文言は、私儀補充隊に編入され、實に殘念に堪へず、此に血書を以て出征願上候間、何卒御聞濟み下され度切に願上候

第二大隊長殿

上等兵 池田可吉

庵原郡興津町字中宿豫備歩兵一等卒伏見伊助(二十六才)同郡袖師村同一等卒平岡忠作(二十六才)の兩氏は、先年同期生として同一中隊に勤務し、骨肉以上に親しんでゐたが今回又復兩氏共同時に召集に應じたけれど、兩氏共補充隊に編入されたので大に遺憾に思ひ、是非出征隊に参加したとの嘆願書を聯隊長の手許へまで差出した。

濱松市鍛冶町後備歩兵一等卒内山與五吉氏(二十八才)は、熱烈なる従軍志願書を血書して、濱松聯隊區司令部に提出した。而かも同氏には、妻女みつ(二十九才)長男一園(五才)長女君子(二才)の係累があつたのである。

岳南の勇猛將卒出征の日までに、原田補充大隊長と大枝聯隊區司令官との手許へまで集つた従軍志願の血書が約百九十通——そうして、兩氏は殆んど慰撫の辭に窮したといふ。

然うした悲壯な幾多の挿話の試みられてゐる時、我が岳南旅團管下の兩聯隊は、四日夜から五日の午前——五日夜から六日の午前へかけて、梅田驛に安着した。そゝして既定の營舎に分宿した。

威風堂々。

士氣充溢。

岳南の健兒の凜たる軍容に接した上方の人達ちは、何れも手を拍つて其の勇武を賞讃した。——其處の大迫師團長も、大久保知事も、池上市長も熱誠の裡に出迎へて等しく其の遠征を感謝した。——其の時、多くの出迎への人達ちに圍はれた淨法寺旅團長は、聳えた肩をゆすぶりつゝ、

『私の軍は日本一の峻嶺で、鍛練に練へた強者だから、峻山に馴れ切つてゐるのみならず、雪は年中見て居ますから、是からの寒さも一向怯げませぬわ』
斯う云つて莞爾とする。

——岳南健兒の氣魄の雄大なる、全く富士の峻嶺の賜だつた。

六日朝から七日にかけ——七千の貔貅は、各自御用船に分乗して、愈々故山を離れた——浴びせられた萬歳の喊聲！

將士の意氣や、既に業に、天に沖して居た。

其九 戦闘参加

(一) 風悲し異郷の墓

我が岳南旅團先發隊は、八日無事勞山灣に上陸、九日到着す可き本隊のために、着々準備を整へ居れり、既に數里以内に敵軍を遙見し、般々たる轟砲を耳にす、一隊の志氣は爲めに沸騰せん許りなり——我が岳南旅團幹部は、九日午後勞山灣に上陸、更らに豫定方面行進のため後發聯隊の到着を俟つ傍ら、戦闘の準備に取掛りしが眼前數里にして般々たる砲聲斷續し、一隊の士氣爲めに軒昂押へんとして押ふ可らず、一刻も早く豫定の陣地に就かん事を熱望して止まず——
此んな飛報が、十日過ぎには、モウ岳南の人々の耳朵を打つた。——遺族は更な

り、聞く人々の誰れ彼れは、『幸あれかし』と神かけた。

西の空にかゝつた黒い雲すら氣にかゝる。——
岳南旅團は、十一日までに全たく勞山灣に上陸を終へた。静かな海路——壹岐や對島の島々が、水天鬚鬚の間に淡い影を一点、二点——夜は、敵艦万一の襲來を警戒し、船尾の燈火を滅して、闇の中を縫つて走つた——明くれば黄海だつた——颯爽たる長風ハタ／＼と帆綱を鳴らす——岳南の勝地に人と成つた健兒も、斯うした勝れた情景に、戦ひの首途と云ふ悲壯な心持ち以外、或る裕かな一種の氣分を味はふを得た。——

斯くて、岳南旅團は、既に同地に轉戦して居た青島攻圍軍と合し、今や新來の精銳の意氣を叱咤して、大に岳南健兒の果敢を誇示しやうとした。

陸軍中將神尾光臣氏、それは、久留米の第十八師團長であつた。而も、青島攻圍

軍の總司令官として、八月以來山東の山河に、威武を大ひに發揮してゐる猛將であつた。——陸軍少將山梨半造氏、それは、攻圍軍參謀長の重任を帯ぶる、——企劃せらるゝ帷幕の裡の神策鬼謀は、能く、勝を千里の外に占め得るの好參謀長であつた。——陸軍少將山田良水氏、それは在福岡の、久留米旅團長であつた。——陸軍少將堀内文次郎氏、それは、在長崎縣の、大村旅團長であつた。——陸軍少將渡邊岩之助氏、それは、廣島灣要塞司令官であつた。——これに加はふるに、我が岳南旅團長陸軍少將淨法寺五郎氏。五少將一中將——近世の戰術と、戰略に造詣深い其の軍事智識と、忠君愛國の赤誠と、大和民族特有の勇武——それらは、モウ直ちに青島の堅塞を一蹴し得て餘りある凡ての武器であつた。凡ての理由であつた。

攻圍軍司令部を始め、參謀部——副官部——監理部——何れも既に敵前數里、日夜、殷々たる砲聲聞えて絶え間がない。——時に、頭上の高空を敵の飛行機が飛んで行く。プロペラの音。其處に投下せとすゝる爆彈が藏せられてゐるかと思へば、

聞くだに、心持ちは好くない。

——それでも『武』で固めた將軍等には、綽々たる餘裕が常に存してゐた。——漢籍の好きな山梨將軍は、行く先きの陣營で、ぼつり／＼讀み減らして居た。佛蘭西仕込みの華奢な渡邊將軍は、時に、赤い短靴を穿いて、路傍に嬾々と咲く秋の草花を觀賞した。堀内少將は、屢は最前線の巡察に出懸けた。——そして、戰線に立つた將校には必ず握手を交換して連日の勞苦を犒ひ、兵士の健康状態を聞いたりなどした。山田將軍は、白シャツの上にカーキ色の外被を掛け、一兵卒のやうな風体で、あたりの陣營を廻つた。

——淨法寺將軍——燕骨を表明したやうなアノ魁偉な容貌で、部下に優しい劬はりの言葉をかけること、珍らしくなかつた。

何等の支障なく、我が一万に近ひ岳南旅團の健兒は、慘憺たる戰跡を辿つて隊伍

整々、砲彈の爆聲を聞きつゝ前進した。——即墨、西城、守村、北曲を経て——流亭は、實に佐久間少佐戦死の地であつた。流亭の東方約百米突の河岸にある、一小廟宇の側にあつて、双眼鏡を手に頻りと敵状を偵察中、敵の一彈を受けて、遂に名譽ある陣歿を遂げた佐久間少佐の戦跡と聞いた時、健兒の胸は今更らに時めいた。流亭から白沙河を渡つてしばし、小村落仙家寨の入口には池部歩兵中尉と、藤丸歩兵一等卒の墓標が秋風に寂しく立つて居た。

軍馬の蹄と、砲車の轆に荒廢した李村は、最も慘狀を呈し居た。此處は、李村河を挾んで商家四十戸、民家七十戸の小さな町であるけれど、河を沿ふてアカシヤ、柳など密生しアカシヤの繁みの中に赤い窓、青い窓の洋館が見える。恰も亡び行く獨逸の勢力の名残りを止むるやうに。——立並ぶ家々の何れへ入つて見ても踏み碎かれた商品が塵芥の如く山積してゐた。砲彈が屋根、壁、所嫌はず打抜いて、満足な家は一つもない。家の主人が窃と裏口から忍び込んで、恨めしさうに眺めてゐる

のもあつた。砲彈に撃ち倒された納屋から、動物の腐つた異臭が起つて、流石に神經を戦かせる。野犬は、到る處の路上に斃死してゐる馬や豚を圍繞して、鬼氣人に迫ると云つたやうな感と興へた。青蒿の絡んだ露臺は、地上に焼落ち、高貴な家具は散亂し、數臺の自轉車はヘシ潰されてゐるなど、古羅馬の廢墟も宛ら斯うかと、一入「戦争の悲哀」を新たにせぬ者とはなかつた。

砲彈の響音、頻りに耳に入る。

健兒は、満身の熱血の湧き立つのを覺ゆつゝ、更に更に進軍をつゞた。

巫山——

その麓に樹つ三基の墓標。それは、堀内旅團に隸屬する歩兵少佐佐藤嘉平次氏同大尉岡千太郎氏以下の英靈を祀れるものであつた。

——岳南健兒の未だ故國に在つた九月二十八日のことだつた。巫山攻撃の決死隊を組織した佐藤大尉（當時大尉であつた）は、其の指揮官として奮闘善戦、遂ひに三

十三名の部下と共に壯烈な戦死を遂げたのである。

未だ木の香の新らしい其の墓標——小さい丘は一面に小松が生ひ茂つて、其後に
恰も屏風の様な恰好の巫山が聳えて居る。是を背景にして其の墳墓は作られてある
のであつた。一間四方程土を二重に盛り上げて、中央の大墓標には、「陸軍歩兵少佐
藤嘉平治以下、三十三名戦死之墓」と墨痕淋漓、鮮やかに浮び上つてゐる。そして其
横に稍下つて又一基（嗚呼忠勇義烈大日本佐藤少佐之墓）と書いた木標もあつた。小
松が一本宛兩側に植ゑられて、花たてには黄色な野菊が數本宛と、敵の砲彈が二つ
左右に据ゑてある。右の方には古い角ランプを紐で吊して、「佐藤少佐の墓使用」と
硝子に書いてあつた。白張提灯の代りであらう。墓標の前には一枚の角な石を据
ゑて、其上に、兵卒の食べた麥飯の握つたのと、梅干が供へられ、小さな茶碗には
水さへ盛つてある。煙草も、其の供物の一つであつた。正面には、急造の石段が二
つ三つ造られ、墓の周圍は四間四方程土を固めて心許りの玉垣に造られてある。玉

垣の外には『弔我部下戦死者一同之忠魂堀内少將』と、記した木標があつた。

——巫山の天險を脊にして異郷に眠る勇士の偉靈！我が健兒は何れも立ち止まつ
て敬禮して過ぎた。聞けば、此處を通る堀内旅團の兵卒は、必ず墓標の前に不動の
姿勢を執り、捧銃をした。——伸びて髻むぢやらになつた頬に、涙を傳へるものも
あるといふ。そうして戦友の靈を慰めた。

——巫山の嶺上に夕陽春いて、風徒らに寒し。

(二) 非戦闘員立退

西侍従武官。

壬生東宮武官。

斯ういふ人達ちの尊い慰問を受けて、我が將卒は愈々君國に奉ずるの一念を高め

た。殊に賞罰に明かな神尾總司令官は、巫山で名譽の戦死を遂げた佐藤少佐の殊勳を讃えるべく

●佐藤中隊の隸属する大隊は巫山攻撃に當り特に佐藤中隊を選抜して標高三百四十一米突岩石屹立せる巫山に於て、敵の防禦盡さざるなきに萬難を排して前進せしめ、中隊長、小隊長相次で戦死せるに拘らず、邁進、爆彈下を潜りて突撃し、遂に巫山を占領して全部の敵を捕虜とし、主隊の攻撃進捗に容易ならしめたる壯烈の行爲を表彰す云々。

●との感謝状を佐藤中隊は勿論、該戦闘に参加した第一個大隊と第三個中隊、第二個小隊に夫々授與し、士氣の鼓舞を怠らなかつた。

斯くて、各隊とも、其の功名を争ふ。

敵は、だん／＼壓迫せられて行つた。而し彼等は野猪の如き大膽——強膽を其の特有とする民族である。戦術を無視して一時に猛り立つ無暴な軍人であつた。

誤れる大膽と、常軌を逸した暴力とて、彼等は折々我が軍に微力な、抵抗を試みるのであつた。

●敵の飛行機ルンブラー式は、我が後方陣地の上空を翹り、數箇の爆彈を投下したるが、幸ひに何等の損害なかりき——敵は海泊河の防禦線に退却以來、我前進部隊の攻撃作業并に、後方各隊の聯絡行動を阻碍せん爲め、日夜砲撃を止めず、我一線に對しても、ピスマーク、モルトケ、イルチスの各砲壘より盛に砲撃したり、されど我軍の夜襲を極度に畏怖する餘り、一地區に向つて約二千發の砲彈を亂射し來りたれば、我全線に亘りて發射せる彈數は、少くとも八千發を下らざるべし、而して少なき日と雖も一日平均二千發位發射し居れり、尙ピスマルク、モルトケ、イルチスの各堡壘の砲彈は、約三里半の遠距離に達せり、敵は我軍の侵入に對し、各所に多數の地雷を梨畑及び甘薯畑に埋没し、其危険云ふべからず、依りて我軍は専ら之れが發掘に努め、第一線前方は最も危

險なり——我が陣地の偵察任務を帯べる敵の繫留気球は、イルチス山より飛揚し頻りと偵察に努めたり——

抵抗は、獨り陸軍方面のみならず、海軍方面に於ても、矢張り執拗な抵抗を試みてゐた。曰く

敵の砲艦、驅逐艦各一隻は四方北方地區に工事中の我が部隊に對し、砲撃を加へしを以て、我軍は重砲隊をして直ちに之れを射撃せしめたり——敵砲艦イルチスと驅逐艦エヌ九十號は、滄口沖より膠洲灣深く寄せ來りて、孤山一帶の占領地に據れる我右翼を砲撃し、參加の英國軍を悩まし、且つ我第二野戦病院に向つても砲弾を送るより、我が軍は先づ孤山に野戦重砲を竊かに配置し、イルチス艦の近づくを待つて砲火を開くや、敵艦は之の不意打に周章狼狽し、應

戦しつゝ一旦青島方面に退き、再び陣容を整へて我が射程内に來り、我陣地目蒐けて盛んに砲火を開く、我砲臺は之に對して應戦し、砲戦猛烈を極む、海陸一帯硝煙濛々砲聲天地を震撼せり、斯くて接戦二時間の後、敵は遂に我砲撃に多大の損害を受けて沈黙、膠洲灣西南岸に向つて逃げ去れり——敵の飛行機は我が工作船關東丸に二個の爆弾を投下したるも、命中せず、爆弾は却々大型の物にて、水に落ちて直に爆發せり——

岳南旅團の健兒が、未だ前進をつゞけてゐる十二日早朝のこと、

『敵の飛行機第一線に現はる』云々。

との報に接した我が司令部では、直ちに我が海陸飛行隊に對して、之れが追撃を命じた。——

陸軍は坂本、内藤兩中尉、モ式三號に、長澤中尉、武田少尉ニユーポールに、眞鍋中尉、小關少尉はモ式八號に、夫れ々々機關銃及び爆弾を携へて搭乗、急遽我が陣

地の上空に出動した。此時敵の飛行機は右方より逐次孤山方面に進行しつゝ、あつたが、我が三機の出願に驚き、俄然進路を一轉し、巫山沖に逃れんとして三千米突の高空に昇騰した。此の時

我海軍の——フ式第二號に山田大尉、飯倉中尉搭乗之れ亦攻撃兵器を携へて急進し來れるに會し、敵は愈々狼狽し、再び孤山方面に轉じた。そこで我がニューポールは、逸早く其退路を斷ち、茲に海陸四機聯合して機關銃を連射し、敵亦應戦して壯快なる空中戦を演出した。而し、敵の力は及ばなかつた。——危機一髪、折柄青島上に湧出せる黒雲に乗じて、全く姿を没したは遺憾だつた。敵の飛行機は之が爲め、着陸地點を發見し得ず、且つ雷雲に打たるゝを恐れて、遠く膠洲灣上に逃げ去つた。此の空中戦に於ては、彼我共に損傷無かりしも、我が軍は斯くて敵の偵察を不可能ならしめ、飛行一時間半の後各根據地に引揚げて凱歌を奏した。

陸に、海に、空中に、斯うして戦機は刻々と熟して行つた。——戦雲漠々、天日爲めに暗し。

勇猛果敢な我が將卒は、恰も疾風枯葉を捲くの概を以て、益す敵を壓迫した。總攻撃！總攻撃！！大河を決するに似た我が大軍が、今や將に敵軍の悉くを屠り盡さんとした時、突如、至仁至慈の我が 天皇陛下は、十二日、青島内の非戦闘員立退きの勅諭を下賜せられたのであつた。

——聖恩敵人に及ぶ。畏しとも其の大御心。
此處に於て、神尾、加藤の陸海兩指揮官は、其の日、直ちに敵將ワルデック總督に對し、青島要塞内に在留する敵の非戦闘者と、そうして、中立國人を鉄火の慘害から免れしむるの聖旨を、次ぎの如き條件の下に、無線電信で傳へたのである。
一、愈々非戦闘員中立國民の立退をなすに就ては其國籍職業身分男女の區別を

表に製し送る事

- 二、此表は更に十五日午前十時同一地点に於て是を受取るべし
- 三、其人々は十五日午後二時に同一地点に兵を出すに就き立退人民は白旗を携へて同一地点に來り受渡しをなすべし

四、一人に付荷物一個宛の携帶を許す但し必要と認めたる時は檢査を行ふ

五、戦争に關する凡ての物品書類を發見したる時は日本に於て是を沒收す

野猪のやうな、そして、豺狼に似た獨兵も、斯うした至仁至慈の神の傳へに接しては、定めし深い感慨に耽らずには居られなかつたことであらう。之れに就いて、我が一軍事通の曰く

「此の有難い聖旨に對し、敵が如何なる態度に出づ可きかは固より推測し難いけれど、假令全軍の士氣が沮喪し居る共、要塞守備軍の責務上彈藥盡き、糧食盡さる最後迄は、己むを得ず奮闘を續け、又萬一降伏するにしても、何等の抵

抗を試みずして、開城の手段に出づるやうの事は無からうと思はれる、さすれば此際老幼婦女及び中立國民を戰線外に送り、以て後顧の憂ひを除いた後一合戦試みやうとするは人情である、併し敵は既に多くの家族を避難せしめ、殘る者ほ僅少で、中立國人も米國領事以下數名の米人が居る位に過ぎず、又支那苦力の如く軍事上の行動に携はつて居る者、並びに軍機を漏洩する虞れの有る者等は、退城を許可しないだらうから、我文明的の態度に浴して避難する人々は、餘り多數ではあるまいと思ふ。

而して此傳達に基き、彼れは速時軍使を出して我軍使と指定の場所に會合し避難す可き人名、國籍等を認めたる書を我れに致し、同時に其人々を授受す可き場所、日時及び方法、避難せしむ可き地点、其他之に附帶する總ての事項を協定した事と思はれるから、十三日中か遅くも十四日朝には今迄青島の要塞内に籠居した前記の人達は、制限された携帶品を持ち、白旗を高々と掲げた敵の

軍使に導かれて、既定の場所に來り、其處で我軍使に渡される筈である、其間彼我兩軍は全く砲撃を中止し、敵味方の差別を設けず、眞に仁義の大道上に立つ神聖森嚴なる光景を現出するのである、尙斯くの如き例は日露役に於ける旅順攻撃の際にもあつたが、其時は確か船で上海邊に送つたやうに記憶する、併し今回は陸路中立地帯に送られるであらう、扱てこれが了ると、愈々本舞臺に懸る譯であるから、必要があれば勸降使をも送らうし、又遠慮會釋なく攻撃にも着手する事になるのだらうと思はれる』云々。

勅諭の下賜せられた翌十三日午前十時、果して兩國の軍使は東吳家村に於て會見した。——我が攻圍軍參謀磯村砲兵大佐と、そうして青島總督ワルデック將軍副官海軍野戰砲兵少佐ゲオルク、フォン、カイゼルの兩軍使は、みじめに荒廢した東吳家村の戰跡の一部落で、兩三名の通譯を隨へて相對した。磯村大佐は、參謀肩章の附した軍服に勳三等章を佩び、騎馬であつた。カイゼル

少佐は年齢三十四五、豊頬無髻にして鼻眼鏡を掛け、カーキ色の折襟の軍服に胸間に勳章を佩び、其内に我が日本帝國の瑞寶章一際目立つて見え、鐵製の副官章を肩より斜に吊し、ヘルメットを冠り、赤革長靴を穿ち、長劍憂々と地に音させて歩み來た様子は實に堂々。——而し、攻めらるゝ人と攻むる人、其處に異なる一種の陰影があつたのである。

斯くて、兩軍使の一切の協定は、一時間程にして終つた。そうして我れの要求通り十五日午後二時を期して其の非戰鬪員の授受を、膠洲の東南方塔埠頭に於て試みられた。——白旗を高々と掲げて敵兵に送られた米國領事及び其の隨員の支那人、獨逸婦人小兒等若干名は、何れも我が軍の手に依り、鐵路、濟南方面に護送せられたのである。

こゝに、我が聖恩は、異郷の名無し草にまで、全く普ねいた。——
今に總攻撃！

